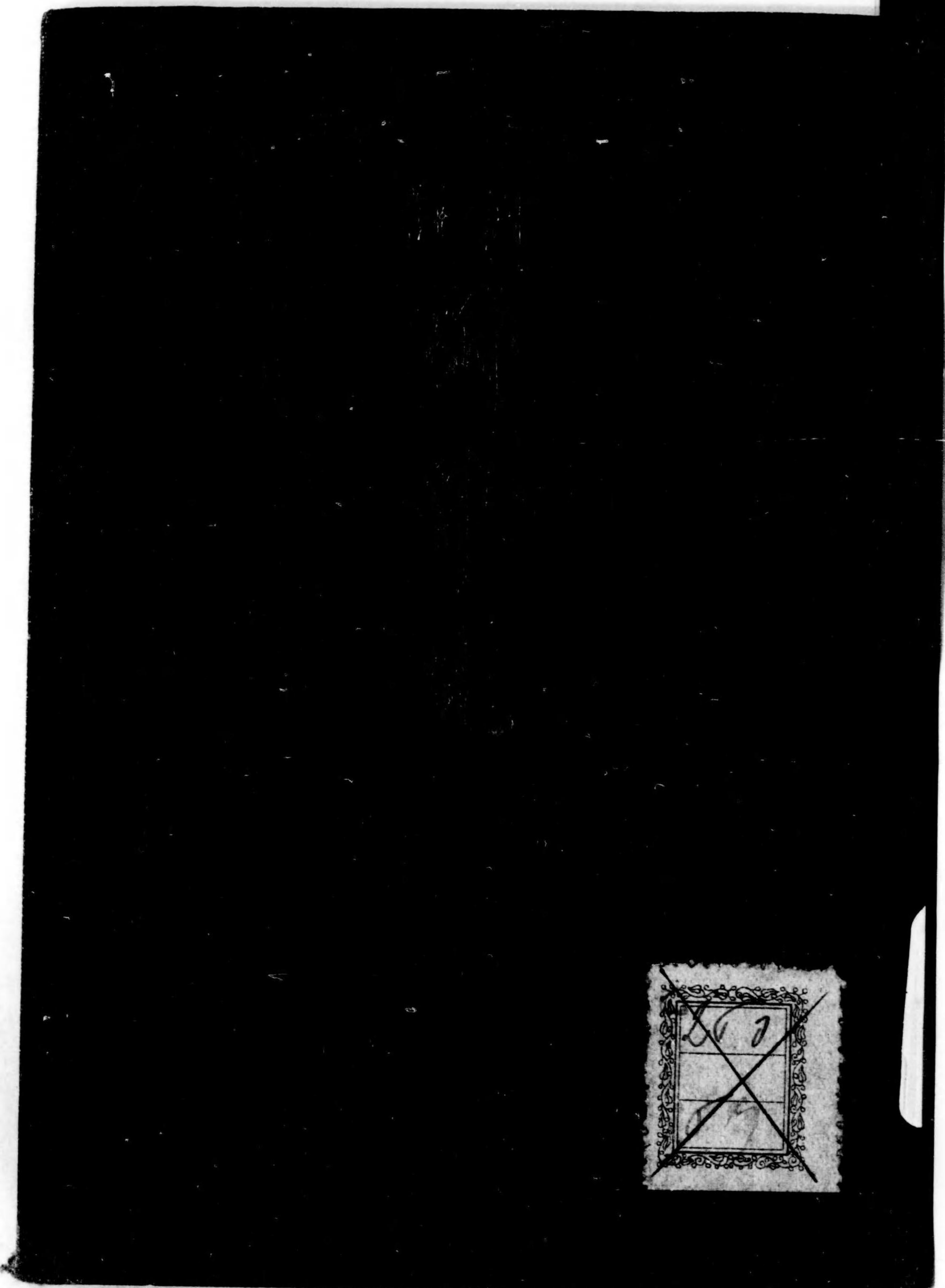
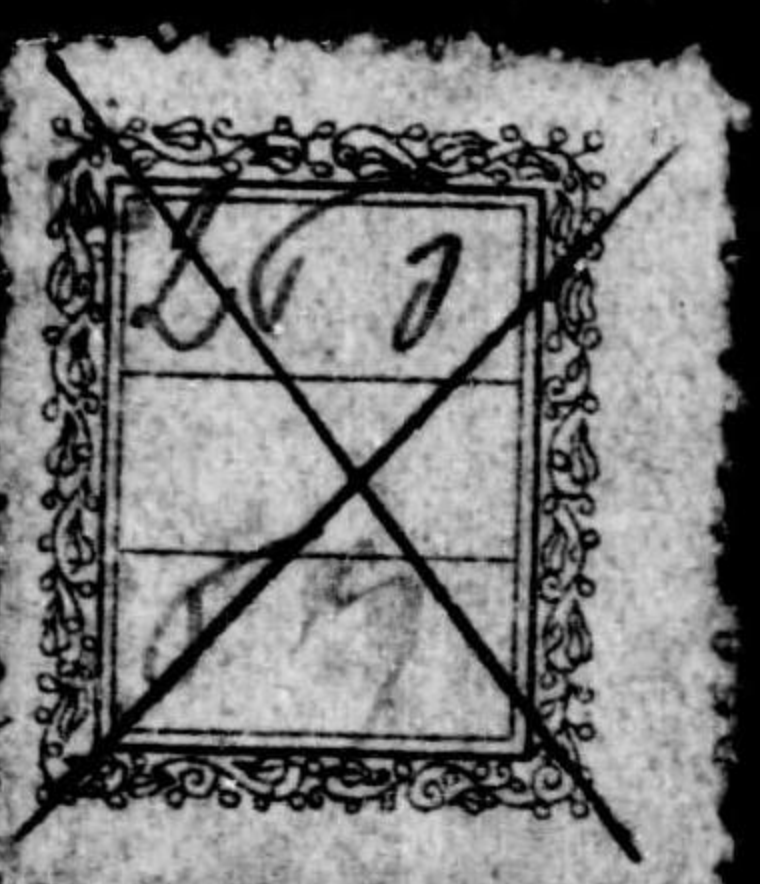


始

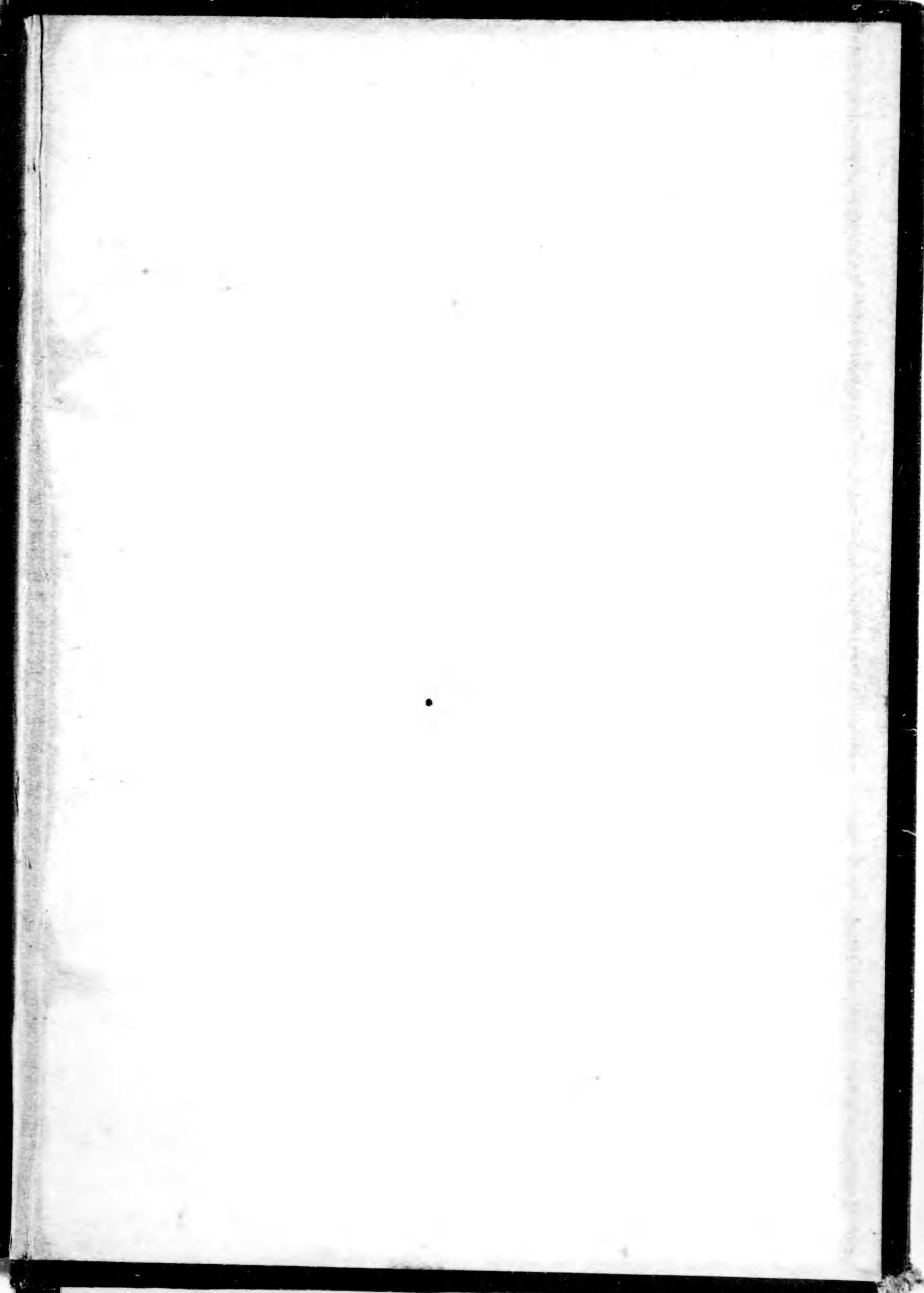
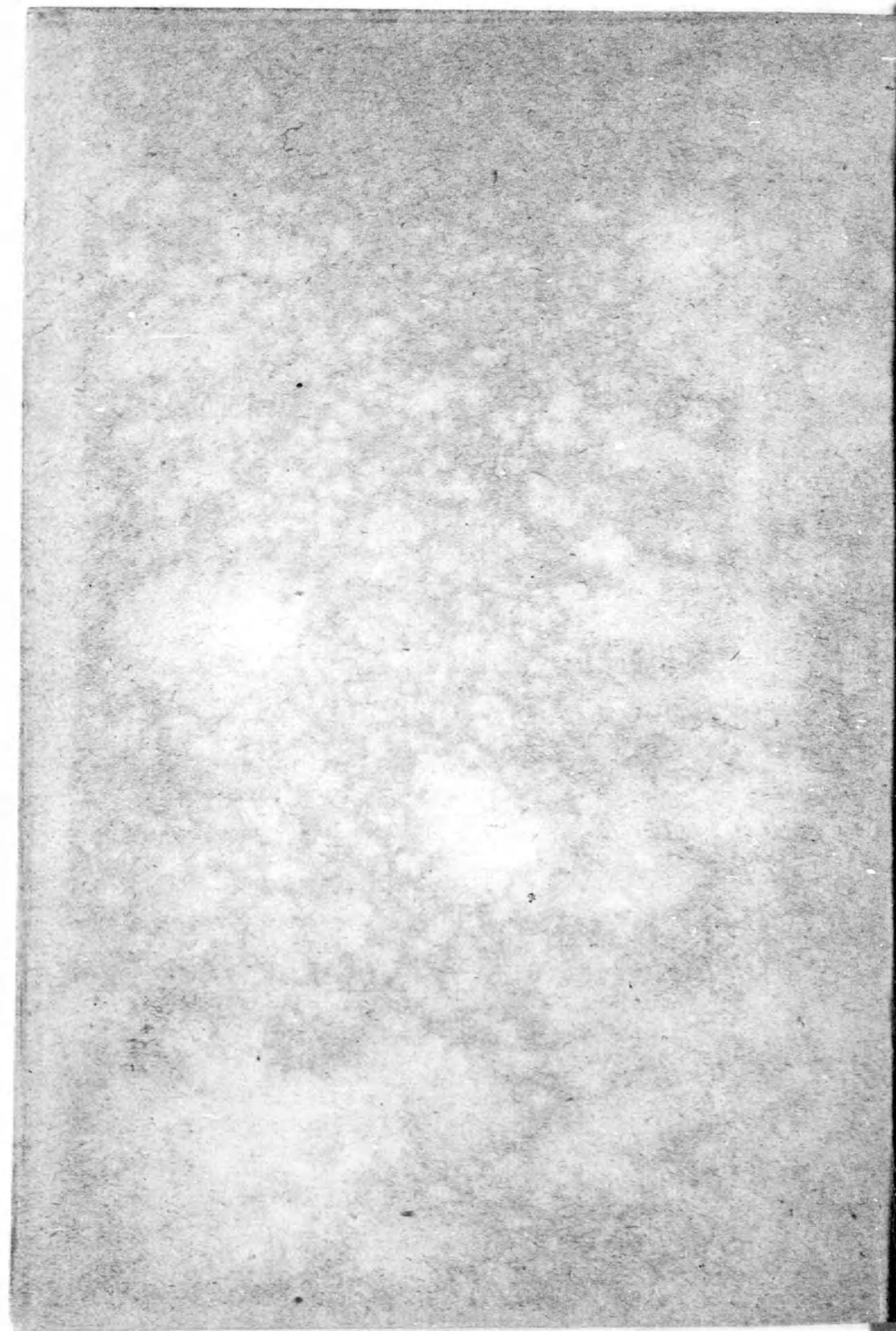




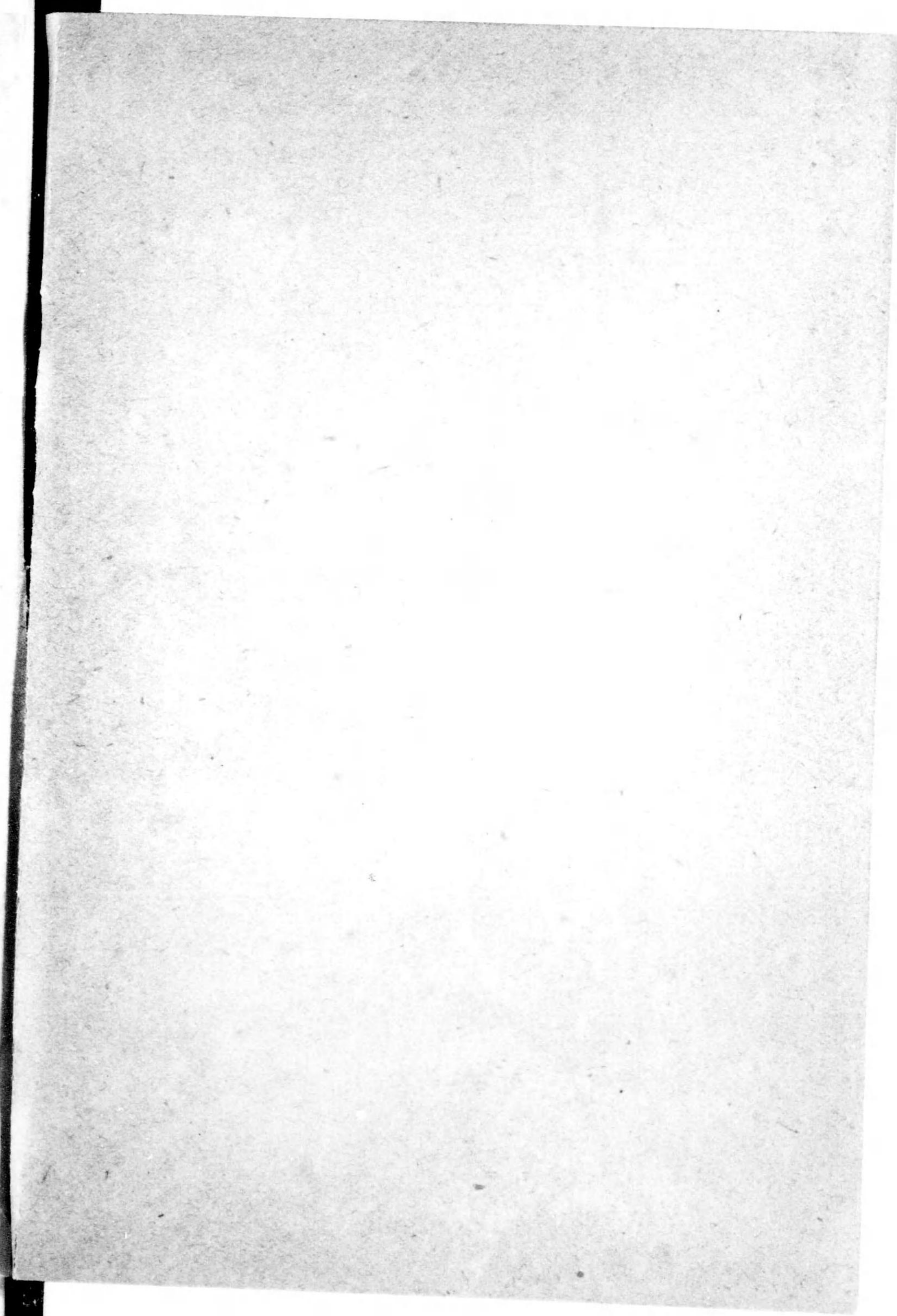
評註  
御筆先













特100

259



御  
筆  
先





教祖三十年祭紀念の爲めに

目次

|         |       |
|---------|-------|
| 緒言      | 一—一八  |
| 御筆先     | 一—二〇  |
| 附録      |       |
| 甘露臺圖解   | 一—三   |
| 甘露臺三十下り | 一五—一八 |
| 御神樂歌    | 一九—三六 |



## 緒言

今回の三十年祭には本部を始め部下教會に至る迄一般に力瘤を入れて居る様である。けれども其の力瘤も建築とか儀式とかの如き一時的のものに向つてとあつて眞に永久的のものに向つてはない。

基督曰く

「我慈悲を好みて祭祀を好まず」

と。我が教祖の精神も亦此處にあるのである。従つて徒らに一時的のお祭り騒ぎの爲めに多大な時間と勞力と物質とを空費するの



は眞に教祖を紀念する所以ではない。眞に教祖を紀念せんと欲せば其の精神を一段廣く深く高く遠く強く繼續發展するにある。

此の意味に於て今日迄埋没せられて來た教祖の遺著を公表するのは決して無意味な事業ではあるまいと思ふ。否なく寧ろこれより大なる事業はないのである。私が今回御筆先を發表させて戴いたのも全く此の趣旨に外ならないのである。

天理教祖自身に筆をとつて書き遺された著書が二つある。其の一つは御神樂歌にして他の一つは此處に附註して發表した御筆先である。

御筆先は明治二年の正月より明治十四年の九月に至る十二年間

の記録に係るものにして始めは神想の湧くがまにく／＼弟子達に傳へたものであるが弟子達の内よくこれを記憶し得るものがなかつた爲め遂に筆に残されたのである。

之れを記録せられる時の状態は恰度詩人が天來の妙想に打たれる時自分の家だらうが他人の家だらうが構はず飛び込み壁だらうが卓子掛だらうが構はず書き附ける様なものであつた。神想が來ると簡單に紙筆と云はれるが其の時直ぐやれば良しやらなければ其れ限りになつて了ふ。其れだから側の人は何時でもやることの出来る様に常に紙と筆との用意をしてゐた。

此の神想の下る時は勿論一定してゐない。朝下ることもあれば



晝下ることもあり夜下ることもある。夜下る時はランプ暗燈もない暗闇の中に筆をとつてサラ／＼と書かれたが其れを朝になつて見ると晝書いたものと寸分違はない出来であつた。けれども教祖は多く其の時何んなものを書いたか記憶してゐない。後で人からは／＼云ふことが書いてあると云ふことを聞いて

「あゝ其うか」

と云つて始めて聞いたといふ御様子であつた。

御筆先に載せられたる歌数は凡て、千七百首近くの多數であるがこれはバラ／＼の紙に書いて箱の中に入れて置いたのを後から淨書せられたものであるから順序の如きもマチ／＼にして一定し

て居ない。又た其の歌も其の時／＼に神の口より響いて來る言葉を筆に表はしたものであるから或る部分は叙情詩となり或る部分は叙事詩となつてゐて決して秩序立つた一篇の述作ではない。

けれども之れを全體に亘つて通讀する時は吾人は今迄知らなかつた新しき靈氣の簇々として胸に迫るを覺え思はず我を忘れて其の中に没頭せざるを得なくなる。

天理教々理より見たる御筆先の地位は其の形式より云つても其の内容より云つても恰度御神樂歌とお指圖の中間に位すべきものである。即ち其の中には御神樂歌の如く宇宙の哲理と眞實を述べた所もあれば其の時／＼に起つて來る周圍の事情に對して下さ



れた御指圖もある。其れ等が凡て生きた現代語を以つて縦横自在に表現せられてあるから之れを單に歌として見ても近代の新派和歌の到達せんとして未だ到達し得ざる自由の妙境を發揮してゐるのである。

然るに此の偉大なる神の叙情詩的叙事詩は天理教本部の世間を憚る因循姑息の精神より今日迄發表の時機を失して來た。否な彼等のなすが儘に任して置けば今後五十年百年の後と雖も敢て社會に公表することがないであらう。不孝の極と云はなければならぬ。

私は元より微々たる天理教の一信徒に過ぎない。けれども凡て

此の御筆先に限らず重要な天啓の聲が本部の不信不實の爲めに永く土中に埋没せらるゝを悲しみ遂に神と人との爲めに此の天啓詩を社會に公表するの止むなきに至つた。元よりこれに對する教權の壓迫の如きは聊かも私の痛痒を感ぜざる所のものである。

凡そ眞理は黄金と同じく之れを貯藏することに依つて何等の價値をも生じない。其を流通することに依つて始めて其の眞價を發揮するのである。此の御筆先の如き最も然りである。然るに今日の天理教本部は此の現代の通貨となるを待つて社會に公布せんとしてゐる。けれども豫言は豫言の完成に先つて價値あるものにして後れて何等の價値あるものではない。然るに今日の天理教當局



者は云ふ

今日は未だ御筆先を發表する時機が早い

と。愚かや時機は既に四十年後れて居る。而かも彼等は神の此の詩を發表せる時が即ち發表の時機なることを知らないでゐる。もし彼等の云ふが儘に任せて置いたならば甘露臺世界の實現後と雖も尙ほ彼等にとつては時機が早いであらう。

不孝の子よ。親の光を蔽ふ不孝の長子よ。時機は遅れてゐる。而かも四十餘年遅れてゐる。而かも今後尙ほ何十年何百年神の聖意を土中に埋めんとはするぞ！私は此處に本部の優柔不斷を座視するに忍びず此處に英斷を實行した。

凡そ眞理は黄金と同じく天下の共有物である。此の御筆先の如きも中山家一家の爲めに殘されたものでもなければ一部少數の本部員の爲めに殘されたものでもない。實に全世界全人類の爲めに殘されたのである。従つてこれは中山家一家の所有物でもなければ本部一部の所有物でもない。實に天下萬人の共有物である。もし中山家が教祖が中山家の出なるをもつて其の著作も中山家の所有物と信するならば其れは大なる誤謬である。何故なれば此の御筆先たるや中山家一家の爲めに書かれた教祖の遺訓ではなく神が教祖の手を藉りて全世界の人類の爲めに下された聖訓であるからである。況んや一部少數の本部員をや、私が此の書を此處に公表



したのは實に以上二つの理由に基くのである。

思ふに彼等が此の書を公表するを固く拒む理由は此の書に依つて天理教を誤解せられんことを恐るゝにあるべしと雖もこれは今日の政府今日の社會をもつて四十年乃至五十年以前の政府もしくは社會と同一視してゐる誤解より起るのである。現に今日の本部員等の誤解を恐れてゐる天理教の新創世説即ち人間は鱗より昆虫魚類鳥獸の時代を経て今日の人間に發達して來たと説く新創世説の如きは實に進化論の先驅をなすものにして何等怪しむべき事實ではないのである。唯教祖が此の説を唱へ出した當時に社會より荒唐無稽の妄説を唱へ出したが如く誤解せられたのは當時の社會

の智識がこれを解する丈けの力がなかつた爲めである。

更らに天理教當局者の最一つの恐怖は此の書の發行に依つて天理教と政府との關係天理教と國家との關係を政府より誤解せられはしまいかと云ふ杞憂であるがこれは當時の官憲が如何に神意を誤解して天理教に迫害を加へたか當時の事情を知るものは神の怒の當然なることを認めるであらう。

勿論御筆先の中には

今の道上の儘やと思てゐる心違ふで神の儘なり

上たるは世界中を儘にする神の残念これを知らんか

これまでは萬づ世界は上の儘最うこれからは文句變るで



此の世を始めてからになにもかも説いて聞かしたことはない  
ので

上たるは世界中を我儘に思ふて居るのは心違ふで

高山に育つる木も谷底に育つる木も皆同じこと

と云ふ様な歌があるが此處に上と云つてゐるのは當時の言葉で云  
ふ政府と云ふ意味に當るので直接皇室を指したのではない。次  
の歌に依つて見れば殊に此の意味が明かである。

此の世を始めてからに何もかも上へ教へたことはあるまい

此の度は何か萬づを上たるへ知らして置いた事であるなら

其れからは皆には思案するもあり皆寄りよふて話ししたなら

其の中に眞實心頼もしい思ふて思案するものもある

即ち此處に云ふ上とは一般に政治の局に當る人を廣くさして云つ  
たものである。中には

此の返し大社高山取り拂ひ皆一列に承知してゐよ

と云ふが如き森嚴なお言葉があるがこれは官幣大社石上神社の神  
官や官幣大社大和神社の神官等が警官に讒誣して幣だの鏡だのを  
没取せしめた時發せられたお言葉であつて當時の神の立場として  
之れ位の言葉を發せられるのは何等不思議なことはないのであ  
る。

此等一二のお言葉に依つて政府もしくは社會より誤解を招き折



角今日迄發達して來た天理教が一時挫折する様なことがあつてはならぬと云ふのが天理教當局者が御筆先やお指圖を發表しない根本原因であるが吾人の眼より見れば其の小膽なる眞に憐れむに耐へて居る。

抑も此の世界此の人類は神が作つたか帝王が作つたか！これを考へて見たら譯り相なことである。わけて無い人間無い世界を作つた根の神、元の神、實の神を信じながら其の聖旨を社會に公表することを躊躇する者の如きは初めより根の教、元の教、實の教、止めの教たる世界無二の天理教を信する資格のないものである。もし神の云ふ所を宣傳して此の道が潰れるならば潰るゝ儘に任

したが良いではないか。其の方が何れ程宗教家らしいか知らない。畢竟彼等の考へてゐることは無智文盲の人間の常に抱く憐れむべき杞憂に過ぎない。これは少しく宗教の何物たるを解し天理教の何物たるを解する者には容易に承認せらるゝ所の事實である。

けれどもこれは自分一個の推測であつて實際政府や社會が今尙ほ之れに依つて誤解を生ずるかも知らない。生じたならば生せしめたが良い。其れは誤解する者の誤にして神と神の聖意を表はせる天理教徒の罪ではないのである。其んな表はれない先きの心配迄して大慈大悲の神の聖意を何時の世にか全人類に傳へることを



得べき？天理教の今日の萎靡沈滞は其の原因する所全く此の控え心にあるのである。以上述べたる理由に依り私は天理教當局者の敢て公表しやうとしない所の本書を刊行して沿く世の眞理の熱愛者の爲めに分つ。

私の最初の考は註釋を加ふことは意味を限定する怖があるから一切註釋を加ふることなしに原歌の儘に發表する心算であつたが其れでは却つて初心者の理解に不便を生ずることゝ信じ要所所に簡単な註釋を加へることゝした。元より其の註釋の中には獨斷や想像も多少混入して居るかも知らないから讀者はこれをもつて唯一の典據とせず唯參考に迄供せられんことを希望する。(尙

ほ此の書の詳細なる研究は他日「御筆先の研究」として發表する心算である)

次に此の書の用ゐた原本である。これは本部本の直寫であるから坊間に傳寫して居る御筆先に比して比較的正確のものであるが尙ほ一二の誤謬があつたから他の類本と校合して訂正した。従つて今日坊間に傳つてゐる寫本に比して比較的正確のもものと信ずるのであるが私の第一の目的は寧ろ此の書の刊行に依つて本部の臺本の刊行の機を促進せんとするにあるのである。従つて字形の如きも教祖の直筆には萬葉と平假名との混用と思はるれども本書は讀者の便を計り一切平假名に書き換へた。



其れから本書の附録として甘露臺の圖解と甘露臺三十下り（教祖の作）と御神樂歌とを添へたが之れによつて讀者に多少の便利を與へれば評註者の満足とする所である。

畢竟本書發行の目的は自由研究の便利を與へるが爲めであつて自分一個の解釋を紹介する爲めではない。本書の詳細なる研究は他日「御筆先の研究」として發表する心算である。

紀元九億十萬七十七年一月

大和の地場にて

大 平 隆 平 識

## 御筆先 一號

明治二年（教祖七十二歳の御時）正月より御書取

よろづよのせかいいちれつみはらせどむねのわかりたものはないから  
そのはづやとひてきかしたことはないなにもしらぬがむりでないぞや  
このたびはかみがおもてへあらはれてなにかいさいをどひてきかする  
このところやまとのじばのかみがたといふていれどもとはしろまい  
このもとをくわしくきひたことならばいかなものでもみなこひしなる  
きゝたくばたづねくるならゆてきかすよろづいさいのものいんねん  
かみがでゝなにかいさいをどくならばせかいゝちれつこゝろいさむる



いちれつにはやくたすけをいそぐからせかいのこゝろいさみかゝりて  
だんく〜とこゝろいさんでくるならばせかいよのなかどころはんじよ  
ふ

以上は御筆先の序歌である。以下述ぶる所は天理教信仰の結果に對する神の豫言である。

このさきはかぐらぶとめのてをつけてみんなそろふてつとめまつなり

御神樂歌の製作は慶應三年であるが未だ手をつけてなかつたから此の言葉があつたのである。

みなそろてはやくつとめをするならばそばがいさめばかみもいさむる  
いちれつにかみのこゝろがいすむならものゝりゆふけもみないづむな  
り

りゆふけとは蔬氣即ち農作物のことである。

りゆふけいのいづむこゝろはきのどくやいづまんよふにはやくいさめ  
よ

りうけいがいさみでるよとおもふならかぐらぶとめやてをどりをせよ  
このたびははやくてをどりはじめかけこれがあいづのふしぎなるぞや  
このあいづふしぎといふてみゑてないそのひきたればたしかわかるで  
そのひきてなにかわがりがついたならいかなものでもみながかんしん  
みえてからとひてかゝるはせかいなみえんさきからとひておくぞや  
このさきはかみたるこゝろだんく〜とこゝろしづめてわぼくなるよふ  
このわぼくむつかしよふにあるけれどだんく〜かみがしゆごふするな



り

このよふはりいでせめたるせかいなりなにかよろづをうたのりでせめ

これから以下は主として教祖の長男秀治(戸籍に従ふ)氏に對する御教訓である。

せめるとして、だしするではないほどにくちでもゆわんふでさきのせめ  
なにもかもちがわんことはよけれどもちがいあるならうたでしらす  
ししたらあらはれでるはきのどくやいかなやまいもこゝろからとて  
やまいとてせかいなみではないほどにかみのりいぶくいまぞあらわす  
いまゝでもかみのゆうごときかんからせひなくおもてあらはしたなり  
こらほどのかみのざんねんでゝるからいしやもくすりもこれはかなは  
ん

こればかりひとなみやどはおもふなよなんでもこれはうたでせめきる  
このたびはやしきのそふじすきやかにしたてゝみせるこれをみてくれ  
そふじさいすきやかしたることならばしりてはなししてはなしするなり  
これまでのざんねんなるはなにのことあしのちんばがいちのざんねん

秀治氏がちんばとなつたのは天保九年(天理教立教の年)十七歳の時である。其の後  
教祖は秀治氏に向つて神の云ふ事を聞くなら其れを癒してやると云つたけれども秀  
治氏はこれは病氣で此うなつたのだから神様に頼んでも駄目だと云つて聞かなかつ  
た。故に次のお言葉がある。

このあしはやまいといふているけれどやまひではないかみのりいぶく  
此のお言葉は在來の病氣觀に一新紀元を劃してゐる。

りいぶくもちよとのことではないほどにつもりかさなりゆへのことな



り

りいぶくもなにゆへなるどゆふならばあくじがのかんゆへのことなり

秀治氏は當時の人間としては相當に學問のあつた方であるが素行が治まらなかつた。賭博は打つ婦人は弄ぶ宛然一個の放蕩兒であつた。其の若年にして跛者となつたのも天性の剛情我慢にも依るが前生に其う云ふ因縁があつたからであらう。

このあくじすきやかのかのけんことにてはふしんのじやまになるごころし  
れ

このあくじなんぼしぶといものやとてかみがせめきりのけてみせるで  
このあくじすきやかのかのけたことならばあしのちんばもすきやかとなる  
あしさいがすきやかなをりしたならばあとはふしんのもよふばかりを  
ちよとはなししよがつさんじうにちとひをまりておくるもかみのこゝ

ろからとて

秀治氏は十七歳から河原城のおちゑと云ふ女を妾としてゐた。其の間に出來たのが田村音治郎氏である。其れを一時中山家に引き取つて養つて置いたのであるが教祖の命に依り正月の三十日に辻仲田の兩氏をしておちゑの許へ送り返さしめた。

そばなものなにごとするとおもへどもさきなることをしらんゆへなり  
そのひきてみえたるならばそばものかみのゆふことなにもちがわん  
いまゝではかみのゆふことうたがうてなにもうそやとゆふていたなり  
このよふをはじめたかみのゆふことにせんにひとつもちがうことなし  
だんくゝとみえてきたならとくしんせいかなこゝろもみなあらわれる  
よろづよのせかいぢゆうをみはたせばみちのしだいもいろくゝにある

これより以下五首は信仰の道程を説明せるものである。



このさきはみちにたどへてはなしするごこのことゝもさらにゆはんで  
やまさかやいばらぐろふもがけみちもつるぎのなかもとふりぬけたら  
まだみえるひのなかもありふちなかもそれをこしたらほそいみちあり  
ほそみちをだん／＼こせばおふみちやこれがたしかなほんみちである  
このはなしほかのことではないほどにかみいちじよふでこれはわがこ  
と

いまゞではうちなることをばかりなりもふこれからはもんくかはるで

今迄の教訓は主として教會内部(殊に中山家一家の私事)の問題に限られて居つたが  
以下述ぶる所は人類全體の問題であることを斷わられたのである。

よろづよのせかいのところみわたせどあしきのものはさらにないぞや  
いちれつにあしきといふてないけれどちよとのほこりがついたゆへな

り

このさきはこゝろしづめてしあんせよあどでこふかいなきよふにせよ  
いまゞではながいどふちうみちすがらよほごたいくつしたであらうな  
このたびはもふたしかなるまいりしよみえてきたぞへとくしんをせよ  
このさきはながいどふちうみちすがらといてきかするとくとしやんせ

この三首は人類發達の過程と其の歸趣の近いたことを暗示せられたものである。

このさきはうちをおさめるもよふだてかみのほふにはこゝろせきこむ

これから問題は再び移つて中山家の私事に及ぶ。

だん／＼とかみのゆふこときいてくれあしきのことはさらにゆはんで  
このこどもにねんさんねんしこもふとゆうていれどもかみのてばなれ



車屋のおやそと云ふ者と秀治氏との間におしうと云ふ女子があつた。生れると直ぐお引き取りになつて糊や粥で育て、十二三才になつた時縁あつて大豆越村へ嫁ぐことになつたが母親が苦情を云つて遂に破談となつた。其の後母親の不心得から其の女子を強めて自分の所に連れて行つたが(おしう十八才の時)間もなく死んだ。(其れが故管長未亡人中山玉恵子の前身である)其の事を述べられたのである。

しやんせよおやがいかほどおもふてもかみのてばなれこれはかなはんこのようはあくじまぢりてあるからにんねんつけることはいかんでわがみにはもふごじうやおもへどもかみのめへにはまださきがある

秀治氏の生れたのは文政四年七月廿四日であるから明治二年で恰度五十歳である。

ことしよりろくぢうねんはしいかりとかみのほふにはしかとうけやう  
明治二年より六十年即ち百十歳迄生かしてやらうと仰せられたけれども心の入れ換

へが出来ないで遂に其れから十二年日即ち明治十四年四月十日に亡くなつた。

これからはこゝろしいかりいれかへよあくじはろふてわかきにようば

これ迄に秀治氏の關係した女は何十人であつたか譯らないが今度若い女房を貰つたら其れを合圖にフツツリ素行を改めよと云はれたのである。其の結果教祖御自身御出掛けになつて貰つて來たのが故管長中山新治郎氏の未亡人中山玉恵子の母堂松枝子である。

これとてもむつかしよふにあるなれどかみがでたならもろてくるぞや  
にちく／＼にこゝろつくしたそのうへはあとのしはいをよろづまかせる  
ごにんあるあとのにんはうちにおけあどさんにんはかみのひきうけ

平等寺の小東政吉(松枝子の父)には子供が五人あつた。其の中の二人とは長男政太郎と次男龜吉。三人は長女おさく(松村吉太郎の母)と次女松枝子(秀治氏の夫人)三男音吉である。



よろづよのせかいのことをみはらしてこゝろしづめてしやんしてみよ  
いまでもかみのせかいであるけれどなかだちするはいまがはじめや

今迄も神の世界であるけれども表立つて結婚の媒介をしたのは今が始めてであるといふのである。

これからはせかいのひとはおかしがるなんぼわろてもこれがだいゝち

秀治氏が年齢に似合はぬ若い妻を娶つたことを世間で笑ふといふことである。

せかいにはなにごとするとゆふであるひとのわらいをかみがたのしむ  
めへくのおもふこゝろはいかんでなかみのこゝろはみなちがうでな  
せんしよふのいんねんよせてしゆごするこれはまつだいしかとおさま  
る

世間では年齢が不釣合だとか何んとか様々のことを云つて笑ふけれども人間は其れ

く前生からの因縁(秀治氏は月讀尊の魂松枝子は天食天尊の魂)と云ふものがある  
から年齢の不釣合位は何んでもないと云ふことを説破せられたのである。

以上は主として或る個人に對する教訓であるがこれを單一其の個人に限つた教訓と  
見るのは誤つてゐる。これを人類全體に對する共通の教訓と見るときに始めて深い  
意味があるのである。

凡て眞理は狭く淺く解釋してはならない。何處迄も廣く深く解釋して行かなければ  
ならない。此處に擧げたる註釋の如きは唯參考のみ。これをもつて唯一の解釋と誤  
解せられざらんことを望む。

御筆先 一號終



# 御筆先 二一號

明治二年(教祖七十二歳の御時)三月より御書取

これからはおふかんみちをつけかけるせかいのこゝろみないさめるで

これからは世界に人倫の大道のつくことを歌はれたものである。

かみたるはこゝろいさんでくるほごになんどきにくるこくげんがきた  
ちやつんであそかりとりてしもたならあそへでるのはよふきづとめや

此の一首は教祖が座敷から裏の山を見て詠ぜられたものであるといふことである。

この名吟を想像や臆測に依つて意味を狭めるのは惜しいことであるが之れを内より云へば秀治氏がこれ迄關係した方々の女と手を切つて松枝子と結婚した爲めに家庭の前途に光明を認め之れを外より云へば幕府及び諸大名が倒れて王政復古明治維新



の大業の基礎の固つたものと見る事ができる。一本やうきづくめや。

このつとめどこからくるとおもふかなかみたるところいさみくるぞや  
だんくとかみのしゆごふといふものはめづらしことをみなしかける  
で

にちくにかみのころのせきこみをみないちれつはなんとおもてる  
なにとてやまいたみはさらになしかみのせきこみてびきなるぞや  
せきこみもなにゆへなるといふならばつとめのにんずほしいことから  
このつとめなんのこことやとおもっているよろづたすけのもよふばかりを  
このたすけいまばかりとはおもふなよこれまつだいのこふきなるぞや

天理教が未來永遠の救済教たる所以は此のお言葉の中に寓せられてある。

ちよとはなしのぼせかんできいふてゐるやまいではないかみのせきこ  
み

だんくとしんじつかみのいちじよふをといてきかせどまだわかりな  
い

はやくとおもてよよふとおもへどもみちがのふてはでるにでられん  
このみちをはやくつけよとおもへどもほかなるところでつけるとこなし

外の所とは地場以外の土地をさして云ふ。これ天理教が所謂根の教元の教實の教た  
る所以である。

このみちをしんじつおもふことならばむねのうちよりよろづしやんせ  
このはなしなんのこことやとおもてゐるかみのうちわけばしよをせきこ



む

神のうちわけばしよとは今日の言葉で云へば教會である。

このみちがちよとみえかけたことならばせかいのこゝろみないさみで  
る

なにゝてもかみのいふことしかときけやしきのそふじでけたことなら  
もふみえるよこめふるまもないほごにゆめみたよふにはこりちるぞや

古註に云ふ。河原城のおちゑの死ぬことをさして云つたのであると。参考迄に掲ぐ

このほこりすきやかはろたことならばあとはよろづのたすけいちじよ  
このさきはだん／＼つとめせきこむでよろづたすけのもよふばかりを  
せかいちうどこがあしきやいたみしよかみのみちをせてびきしらずに

このよふにやまいさといふてないほどにみのうちさわりみなしやんせよ

此のお言葉は全人類の深く味ふべき言葉である。

にち／＼にかみのせきこみこのたすけみないられつはなんとおもてる  
たかやまのおいけにわいたみづなれどではなはにごりごもくまじりて

一本でばなにこりてごもくまじりやにつくる。高山のお池に湧い水だとは人間（神  
の子）をさして云はれたのである。

ごもくさへすきやかだしてしもたならあとなるみづはすんでいるなり  
だん／＼とこゝろしづめてしやんするすんだるみづとかはりくるぞや  
やまなかのみづのなかへといりこんでいかなるみづもすますことなり  
にち／＼にこゝろつくするそのかたはむねをおさめよすゑはたのものし  
これからはたかやまいけへとひはいりいかなごもくもそふじするなり



ごもくさいすきやかだしてしもたならあとなるみづはすんであるなり  
これからはからとにほんのはなしするなにをいふともわかりあるまい  
これからは日本と外國との關係を説いて大日本主義を主張せられてゐる。

とふじんがにほんのちいにいりこんでまゝにするのがかみのりいぶく  
唐人とは外國人を云ふ。

だんくごにほんたすけるもよふだてとふじんかみのまゝにするなり  
このさきはからとにほんをわけるでなこれわかりたらせかいおさまる  
からは人類が生長發達するにつれて日本丈では狹隘を感じ段々外國へ連れて行  
つたが段々遠く行くに従つて食料が缺乏し持つて行つた箱が空になつたから其の土  
地を空即ち外國と命名けたといふことである。

いまではかみたるこゝろわからいでせかいなみやとおもていたなり

これからはかみがたいないりこんでこゝろすみやかわけてみせるで  
にちくによりくるひとにことはりをゆへばだんくなをもまあすで

これは參拜者の數の増すに従つて警察の干渉も厳しくなり警察の干渉が厳しくなる  
に従つて信徒の數も益々増加することを豫言せられたのである。然し此の頃は未だ  
本當に警察の干渉が厳しくはなかつた。本當に厳しくなつたのは明治七年頃からで  
ある。これは即ち其の豫言である。殊に意味の深いのは此の次は明治三年四年五年  
六年と切れて第三號の御筆先が明治七年に始まつてゐることである。此等を思ひ合  
はせると益々の神の豫言の意味深長なることがわかる。

いかほどのおふくのひとがきたるともなにもあなじなかみのひきうけ  
めづらしいこのよはじめのかんろだいこれがにほんのおさまりとなる  
たかやまにひいどみづとがみえてあるたれがめいにもこれがみえんか



だん／＼といかなはなしもとひてあるたしかなことがみえてあるから  
しやわせをよきよふにとてちふぶんにみについてくるこれをたのしめ  
なにもかもごふよくつくしそのうへはかみのりいぶくみえてくるぞや  
だん／＼とちうごにちよりみえかけるせんとあくとはみなあらはれる

若江の市兵衛と云ふもの、長男益の十四日に戸板に乗つて自宅へ歸り十五日に死亡  
せることを云ふ。

このはなしごこのことゝもいはんでなみえてきたればみなとくしんせ  
たかやまのほんのものととふじんとわかるもよふもこれもはしらや  
とふじんとほんのものとわかるのはひいとみづとをいれてわかるで

御筆先 一一號終

## 御筆先 三號

明治七年(教祖七十七歳の御時)正月より御書取

このたびはもんのうちよりたちものをはやくいそひでとりはらひせよ

此の歌は門内より無用の建築物を取り拂へとも亦埃を取り拂らへとも解釋すること  
が出来るが(参考 此の年の秋御門を建つ)一説には當時本部の内に假住した甚助夫  
婦(甚助の妻きよは秀治氏と關係があつたといふことである)を他に移轉せしむるこ  
とを歌はれたものであると云つてゐるが参考迄に掲げて置く。

すきやかにそふじしたてたことならばなわむねいそぎたのみいるぞや

なわ(繩)とはたす(正す)とかなほし(直し)はかる(度る)とかのり(法)とか云ふ言  
葉である。なわむね(繩棟)は即ち直棟にして眞直の棟即ち正法をさして云ふ。従つ  
て此の一篇の歌旨を簡単に云へば曲がれる道を直くせよと云ふことである。



しんじつにそふじをしたるそのちかはかみいちじよでこゝろいさむる  
だん／＼とせかいのこゝろいさむならこれがにほんのおさまりとなる  
いまゝではなによのこともわかりないこれからみへるふしぎあいすが  
ふしぎあいすは不思議合圖にして不思議な現象を云ふ。これから秋を合圖に御苦勞  
の道すがらとなる。

こんものにむりにこへとはゆふでなしつきくるならばいつまでもよし  
深い意味の歌である。信仰の自由は此の一篇に含む。

これからはみづにたとへてはなしするすむとにぎりできとりとるなり  
人間の心を水に譬へての御教訓である。

しんじつにかみのこゝろのせきこみはしんのはしらはやくいれたい  
このはしらはやくいれよとおもへどもにごりのみづでところわからん

このみづをはやくすまするもよふだてすいのとすなにかけてすませよ

すいのは水囊即ち瀝水囊のことを云ふ。大和地方は水の悪い（水の悪いのは心の  
悪いのである。もし大和地方の人心が澄めば水も澄んで来る）所である。故に用水  
は多く一度水囊と砂にかけて澄ますのである。其れを思ひ合はせて見ると當意即妙  
の譬喩實に恐れ入った次第である。

このすいのごこにあるやとおもふなよむねとくちとがすなとすいのや  
胸（心）と口とは即ち思想の瀝過器である。従つて胸に健全なる思想を蓄へて不健全  
なる思想を排し口に悪言を慎みて善言を吐くのが胸と口との役目である。

このはなしすみやかさととりついたならそのまゝいれるしんのはしらを  
はしらさへしいかりいれたことならばこのよたしかにおさまりがつく  
このはなしさととりばかりであるほどにこれさとりたらしよこだめしや  
人生は悟り即ち自覺である。自覺より出たものでなければ何等の價値はない。



このよふのにんげんはじめもとのかみたれもしりたるものはあるまい

これから以下は人間始め世界始めの容易ならん重大問題を説かれてある。これを理解するには歴史や傳説に依つて作られた凡ゆる先入觀念を一掃してかゝらねばならぬ。

ごろみづのなかよりしゆごふをしへかけそれがだん／＼さかんなるぞや

このたびはたすけいちじよをしへるもこれもないことはじめかけるでいま／＼でないことはじめかけるのはもとこしらへたかみであるからにち／＼にかみのはなしがやま／＼とつかへてあれどとくにさかれんなに／＼もとかれんことはないけれどこゝろすましてきくものがない

神の嘆きは此處にある。

すみやかにこゝろすましてきくならばよろづのはなしみなとき／＼かすこのよふのためしがたしか／＼けてあるこれにまちがないとおもへよこのためしすみやかみえたことならばいかなはなしもみなまことやでなにかもいかなはなしもさくほどになにをいふてもうそとおもふなめにみえんかみのゆふことなすことはなにをするともちよごにしれまい

はや／＼とみえるはなしであるほごにこれがたしかなしよこなるぞやこれを見てなにをきいてもたのしめよいかなはなしもみなこのどぶりひとものかりたるならばりがあるではやくへんさへれへをゆうなり

日の寄進の奥義である。



このよなきおもふこゝろはちがふでなこがなくでないかみのくどきや  
子が夜泣きするは親の心得違があることを神が子供をかりてお知らせになるのであ  
る。

はや／＼ごかみがしらしてやるほどにいかなことでもしかとき／＼わけ  
おや／＼のこゝろちがいのないよふにはやくしやんをするがよいぞや  
しんじつにひとをたすけるこゝろならかみのくどきはなにもないぞや

これが天理教の根本精神である。

めん／＼にいまさへよくばよきことゝおもふこゝろはみなちがふでな  
現場主義の排斥

でかけからいかなおふみちとふりてもするほそみちみえてないから  
にんげんはあざないものであるからにするのみちすじさらにわからん

いまのことなにもゆふではないほどにさきのおふかんみちがみえるで  
いまのみちいかなみちでもなげくなよさきのほんみちたのしんでいよ  
しんじつにたすけいちじよのこゝろならなにゆわいでもしかとうけと  
る

くちさきのついしよばかりはいらんものしんのこゝろにまことあるな  
ら

だん／＼ごなにごとにてこのよふはかみのからだやしやんしてみよ  
にんげんはみな／＼かみのかしものやなんとおもふてつこてゐるやら

以上九首の歌は何れと云つて差し抜きならぬ信仰の要義を歌つたものである。

ことしにはめづらしことをはじめかけいま／＼でしらぬことをするぞや



今迄も珍らしい助けがあつたがこれから更に一層珍らしい助けをするをいふ。

いま、ではなによのこともせかいなみこれからわかるむねのうちよりこのたびはたすけいちじよにかゝるのもわがみにためしかゝりたるゆへ

若江村の松尾市兵衛病氣に付お助けにお越しになる前三十八日間と云ふもの絶食せられた。と云ふのは神が教祖を疾病(強慾病)にかけて眞に病の苦痛を味はせられたのである。かくの如く自分自身先づ病を経験せられて後眞のお助けに従事せられたのである。

たすけでもおがみきとふでいくでなしうかゝひたてゝいくでなければこのところよろづのことをときゝかすかみいちじよでむねのうちよりわかるよふむねのうちよりしやんせよひとたすけたらわがみたすかる

たかやまはせかいゝられつおもふよふまゝにすれどもさきはみえんで

たかやまは上流社會である。

だんゝとおふくよせたるこのたちきよふぼくになるものはないぞや

ようぼくは用木即ち神の使者をいふ。

いかなきもおふくよせてはあるけれどいがみかゝみはこれはかなわん

心の直きなもののみ神の使者たることができる。

せかいちうむねのうちよりしんばしらかみのせきこみはやくみせたい  
せかいちうむねのうちよりこのそふじかみがほふきやしかとみていよ  
これからはかみがおもてへあらはれてやまいかゝりてそふじするぞや  
いちれつにかみがそふじをするならばこゝろいさんでよふきづくめや  
なにもかみかみがひきうけするからはごんなことでもぢゆよじぎいを



このたびはうちをおさめるしんばしらはやくいれたいみづをすまして  
たかやまのしんのはしらはとふじんやこれがだい、ちかみのりつぶく

高山の眞の柱は唐人やと云ふことは當時日本人が外國人を尊び基督教を信仰したこ  
とを云つたものであると解釋するものがあるがこれは其う狭く解すべきものである  
か否か疑問である。私は寧ろ日本の上流社會の中心思想は一般に外國人の思想であ  
ると云ふことを仰せられたものと廣く解釋するのである。元より私の解釋の妥當な  
るや否や知らない。

かみたるはだん／＼せかいまゝにするかみのざんねんなんとおもふぞ

これは専制政治の横暴を非難せられたもので立憲政治を非難せられたものではな  
い。

いまゝではなにをゆふてもみえてないもふこのたびはせへつうがきた

せへつうとは節即ち時節のことを云ふ。

これからはよふきつとめにまたかゝるなんのこことやらちよとにしれま  
い

いまゝでもしりてはなしてはなせどもといてあれどもなんのこことやら  
これまではいかなはなしをどいたとてひがきたらんでみえてないぞや  
これからはもふせへつうがきたるからゆへばそのまゝみえてくるぞや  
しかときけさんろくにごのくれやいにむねのそふじをかみがするぞや

三六二五のくれやいと天理教立教以後三十六年目の舊九月二十五日の夕刻をさし  
て云ふ。故辻忠作氏の話に其の日の朝龍田の與助の老母トヨが外に一名の婦人を連  
れて本部の掃除に來たから教祖の仰せになつたのはこれだと云つたといふ話がある  
がこれは其んな小さな有形なことを仰せになつたのではない。最つと大きな無形な  
ことを仰せになつたものと思はれる。



しやんせよなんぼすんだるみづやとてごろをいれたらにごることなり  
にごりみづはやくすまさんことにてはしんのはしらのいれよふがない  
はしらさいはやくいれたることならばまつだいしかとおさまりがつく  
このよふをはじめたかみのしんじつをさいてきかするうそとおもふな  
いまでもしんがくこふきあるけれどもをしりたるものはないぞや

神學とか古記とか云つて今日傳つてある所のは何れも四千年以後の作である。  
天理教は凡て其れ等のものない創世時代の事實を説くのである。此處に兩者の大  
なる相違がある。

そのはづやどろうみなかのみちすがらしりたるものはないはづのこと  
これまではこのよはじめてないことをだんくといてきかすことなり  
なにもかもないことばかりとくけれどこれにまちごたことはないぞや

ちういちにくがなくなりてしんわすれしよがつにちうろくにちをまつ

教祖臨終のお言葉に

「何時迄此うしてゐては傍も分らぬ世界もわからぬ助け一條遅れて了ふ」

といふお言葉があつたがこれは社會の迫害が餘りに厳しいので明治廿年正月廿六日  
一時身を幽冥界にお隠くしになつて此の道をおつけになることを豫言せられたので  
ある。

このあひだしんもつきくるよくわすれにんじゆそろふてつとめごしら  
へ  
にちくにかみのこゝろのせきこみはじうよじぎいをはやくみせたい  
これからはにんじゆそろふてつとめするこれでたしかにほんおさま  
る



勤めの人數七十五人。何時ノノまでも變りなき様——教祖

しんじつにたすけいちじよであるからになにもこわみはさらにないぞや

なにもかたすけいちじよとめるならかみのざんねんにさわりつくしやんせよよろづたすけのこのもよふにんげんわざとさらにおもふないまゝではなにかよろづがわからいでみなにんげんのこゝろばかりでこれからはかみのこゝろとかみたるのこゝろとこゝろのひきあわせする

これは宗教と法律との關係をお述べになつなもので宗教がやがて法律に代るべき時代のあることを豫言せられたのである。

このはなしちよとのことやおもうなよかみがしんじつみかねたるゆへ

へ

これからはかみのちからとかみたるのちからくらべをするとおもへよ

神の力即ち宗教の力と上の力即ち法律の力との關係を述べられたものである。

いかほどのごふてきあらばだしてみよかみのほふにはばいのちからを

人間力は有限相對である。神力は無限絶對である。従つて人間力は到底神力に及ぶべからざることを仰せられたのである。

しんじつのかみがおもてへでるからにいかなもよふもするとおもへよいまゝではからがにほんをまゝにしたかみのざんねんなんとしよやら

日本と外國との本末始終の關係を明かにす。

このさきはにほんがからをまゝにするみないちれつはしよちしてゐよおなじきのねへとゑだこのことならばゑだはちれくるねはさかへでる



いま、ではからがゑらいといふたれどこれからさきはをれるばかりや  
にほんみよちいさいよふにおもたれどねがあらはればおそれいるぞや  
このちからにんげんわざとおもわれんかみのちからやこれはかなはん  
このよふはにぎわしくらしめるけれどもをしりたるものはないので  
このもとをくわしくしりたことならばやまいのおこることはないのに  
なにもかもしらずにくらすこのこどもかみのめへにはいぢらしきこと  
なにとてもやまいといふてさらになしこゝろちがいのみちがあるから  
このみちはおしいほしいとかわいゝとよくとこふまんこれがほこりや  
このよふのにんげんはみなかみのこやかみのゆふことしかときゝわけ  
ほこりさへすきやかはるたことならばあとはめづらしたすけするぞや

しんじつのこゝろしだいのこのたすけやまずしなすによわりなきよに  
このたすけひやくちうごさいぢよめうとさだめつけたいかみのいちじ  
よ

にちくゝにかみのこゝろのせきこみをそばなるものはなんとおもてる  
かみたるをこわいとおもていづみゐるかみのせきこみこわみないぞや

信徒等が何れも官憲の壓迫を恐れていづみゐるのを督勵せられたのである。

むねあしくこれをやまいとおもふなよかみのせきこみつかへたるゆへ  
だんくゝとかみのこゝろといふものはふしぎあらわしたすけせきこむ  
このふしぎなんのことやおもてゐるほこりはろふてそふじしたてる  
あとなるにはやくはしらをいれたならこれでこのよのさだめつくなり



このはなしはやくみえたることならばいかなものでもみなとくしんを  
いま、ではしよこだめしとゆてあれどかんろふだいなんのことやら  
このものをよねんいせんにむかいとりかみがだきしめこれがしよこや

此の者とは秀治氏と車屋のおやその間にできたおしうのことを云ふ。此の者のお迎  
ひ取りになつたのは四年以前即ち明治三年である。其の生れ變りが故管長未亡人中  
山玉恵子である。

しんじつにはやくかやするもよふだてかみのせきこみこれがだい、ち  
これまではちゆよじぎいとま、とけどなにもみえたることはなければ  
これからはいかなはなしもときをいてそれみえたならちうよじぎいや  
いま、でのことはなんにもゆてくれなにちうろくにちにはちめかける  
で

これからはせかいのこゝろいさみかけにほんおさめるもよふするぞや  
にんげんのこゝろといふはあざのふてみえたることをばかりゆふなり

あざのふては淺果敢てといふこと

これからはないことばかりといておくこれからさきをたしかみていよ  
ごのよふなこともだん、ゆいかけるみえたることはさらにゆわんで  
このよふをはじめたかみのしんばしらはやくつきたいかみのいちじよ  
めにみえんかみのいふことなすことをだん、きいてしやんしてみよ  
いまのみちかみのま、やとおもっているこゝろちがふでかみのま、なり

天理教は天然自然の道である。法律や學問の力で抑へられる道ではない。

かみたるはせかいちゆうをま、にするかみのざんねんこれをしらんか



これまではよろづせかいはかみのまゝもふこれからはもんくかわるで

今迄は法律萬能の時代である。これからは道徳全盛の時代が來るとの御豫言である。

このよふをはじめてからになにもかもといてきかしたことはないの  
かみたるはせかいぢうらをわがまゝにおもてゐるのはこゝろちがうで  
たかやまにそだつるきいもたにそこにそだつるきいもみなおなじこと

神の眼には上流下流の區別はない。凡て皆な一列平等に神の子供である。

にんげんはみなくゝかみのかしものやかみのぢうよふこれをしらんか  
いちれつはみなくゝわがみきをつけよかみがなんどきどこへゆくやら  
ちよとはなしかみのこゝろのせきこみはよふぼくよせるもよふばかり  
を

だんくゝとおふくたちきもあるけれどれがよふぼくなるやしれまい  
よふぼくもちよのことではないほどにおふくよふきがほしいことか  
ら

にちくゝによふぼくにてはていれするところがあしきとさらにおもふな  
おなじきもだんくゝていれするもありそのまゝこかすきいもあるなり  
いかなるのぢうよぢぎいのこのためしほかなるところでさらにせんぞや  
いまゝでもためしといふてといたれどもふこのたびはためしおさめや  
だんくゝとなにごとにてもこのよふはかみのからだやしやんしてみよ  
このたびはかみがおもてへでゝるからよろづのことをみなをしへるで  
めんくゝのみのうちよりのかりものをしらすにいてはなにもわからん



凡そ定義なくして何事も完全に理解することはできない。貸物借物の理は神の與へた人生の根本的定義である。されば教祖も貸物借物はこれ教の臺と云はれ貸物借物の理がわからないでは何もわからないのやと仰せになつた。

しやんせよやまいといふてさらになしかみのみちをせいけんなるぞやちよとしたるめへのあしきもでもものぼせいたみはかみのてびきや

いま、ではたかいやまやといふたさてよふぼくみえたことはなければど  
天理教の初端は大抵谷底の人が重であつた。これから段々上流社會に向つて道をつ  
けると云ふことを仰せになつたのである。

このさきはたかやまにてもだんくとよふぼくみだすもよふするぞや  
いちれつにはやくたすけるこのもよふかみしもともにこゝろいさめて

にちく／＼にせかいのこゝろいさむならものゝりうけはみないさみでる  
なにもたすけいちじよであるからにむほんのねへをはやくきりた  
い

いまのみちはこりだらけであるからにほふきをもちてそふじをしたて  
あとなるのみちはひろくてごもくなしくたりなりとつれてとふれよ  
にいく／＼のいのいつ／＼にはなしかけよろづいんねんみなとき／＼かす  
二二の二の五つは二月二十二日の夜五ツ時の御筆である。(以下同じ)此の時辻時齒  
痛にて悩みしが教祖はこれにかき餅を與へて噛ましめ因縁をお説き聞かせになつ  
た。

たかやまのせつきよきいてしんじつのかみのはなしをきいてしやんせ  
高山の説教とは神社寺院の説教を云ふ。(當時は一時各地方にて非常に説教が流行



した。其れ故に特に此のお言葉があつたとも思はれる。其れと天理教とを比較研究して何れが根本的價値を有するか確かめよと云ふのである。

にち／＼にかみのはなしをだん／＼ときいてたのしめこふきなるぞや

御筆先 三號終

御筆先 四號

明治七年(教祖七十七歳の御時)四月より御書取

いまのみちなんのみちやとおもてゐるなにかわからんみちであれどもこのさきはおふかんみちがみえてあるもふあこにあるこゝへきたなりこのひがらいつのことやおもてゐるごがついつかにたしかでゝくる

此の御神歌は古い解釋に従ふと五月五日に三味田の前川たき子(教祖の弟の嫁)がお勤めを願ひに來た事を豫言せられたものであると云ふてゐたが新しい解釋に従ふと御本席の御昇天を豫言せられたものであるといふことである。

即ち御本席の御昇天の前に御本席に神が降つて家族に向つて

「サア／＼兼れてから皆んな待ち兼れてゐた五月五日が來たぜ。皆んな勇んでくれ」



といふお言葉があつた。家族の人々は曾つて御筆先の内に五月五日に確しか見える  
でといふお言葉があつたから何んな珍らしいことを見せて下さるだらうと思つて喜  
んでゐると遂に明治四十年舊四月廿九日にお引き取りになつて舊五月五日に葬式を  
出した。

前説は未だ後者の事實の表はれない以前古い本部員の推測になつたものであるから  
信用を置くことはできない。これは神様のお言葉通り御本席の御昇天の豫言である  
と解するのが正確であらうと思はれる。

それよりもおかげはじまるこれをみよよるひるしれんよふになるぞや

おかげはお蔭即ち神の御恩徳を云ふ。

だん／＼とろくがつになることならばしよこまむりをするとおもへよ

此の年の六月に始めて證據守り即ち信符をお出しになつた。其の形は長方形のもの  
で三十一拵らへられた。これは所謂三十一のうちわけ場所に配付せらるゝ考であつ

た。

それからだん／＼ふしんせきこんでなにかいそがしことになるなり  
これからはかみのこゝろはにち／＼にせきこみあるとおもいこそしれ  
いかほどのおふくせきこみあるとてもちぢではなにもゆふでないぞや  
このさきはおふくみえくるひと／＼をはやくしらしておことおもへど  
だん／＼とめづらしひとがみえてあるたれがめへにもこれがみえんか  
これからのあとなるはなしやま／＼のみちをみてゐよめづらしきみち  
おもしろやおふくひとがあつまりてんのあたへといふてくるぞや  
にち／＼にみにさわりつくまたきたかかみのまぢかねこれをしらすに

平常道にいづみ居る者がお障りを受けて來た時の歌である。



だんくつとつとめのにんじゆてがそろいこれをあいすになにもでかける

にちくのかみのころはだんくつかみのころにはやくみせたらかみたるはなにもしらすにとふじんをしたがうころこれがおかしいにちくにかみのころのせきこみはとふじんころりこれをまつなりいまゝでのうしのさきみちおもてみよかみたるところみなきをつけよ

いまゝでのうしのさきみちは丑の先道とも憂しの先道ともとれるが明治七年より先の丑年と云へば慶應元年である。此の年の秋不動院の僧が来て辨難して説破せられて去り法蓮寺光蓮寺の住職及び神官守屋筑前等も亦辨難に來り皆説破せられて去つた年である。又國家より云へば所謂尊王攘夷の論で國論が沸騰し尊王黨と佐幕黨とに二分して國內が亂れてゐた際である。今日は國內が平定したけれども其の前の事

を思案して外國人に注意せよと云ふ意味らしい。

これさいがみなみえきたることならばせかいのころみないさみくるなにもせかいのころいさむならかみのころもみないさむなりけふのひはいかなるみちとおもふかなめづらしことがみえてくるぞやだんくつとなにかのこともみえてくるいかなるみちもみなたのしめよにちくによふきづとめのてがつけばかみのたのしみいかほどのことはやくつとつとめのにんすまぢかねるそばのころはなにをおもふやいかなるのやまいといふてないけれどみにさわりつくかみのよふむきよふむきもなにのことやらちよとしれんかみのおもわくやまゝのこと



生理的の故障は必らず神の異見立腹ばかりではない。神の用向きをお知らせになることもある其れを見聞け聞き分けるのが天理教の信仰である。

なにもかもかみのおもわくなに、てもみなといたならこゝろいさむでだんくとなにもおもわくときゝればみのうちよりもすきやかになるまださきのよふきづとめをまちかねるなんのことならかぐらぶとめやせかいぢうおふくのひとであるけれどかみのこゝろをしりたものなしこのたびはかみのこゝろのしんじつをなにかいさいをみなおしへるでなにゝてもかみいちじよふをしりたならからにまけそなことはないぞや

このさきはからとにほんをすみやかにだんくゝわけるもよふばかりをこれさいがやくわかりたことならばかみのざんねんはれることなりしんじつのかみのざんねんはれたならせかいのこゝろみないさみでるだんくゝとせかいぢゆうをしんじつにたすけるもよふばかりするぞやそのゝちはやまずしなすによわらずにこゝろしだいにいつまでもよまださきはねんげんたちたことならばとしをよるめはさらにないぞや

昔秦の始皇帝は徐福をもつて不老不死の薬を蓬萊の境に求めたが遂に其れを求むることができないで世界並に死んだ。けれども天理教の信仰が進んで神のお思召通りになれば(自然の法則と一致すれば)天より不老不死の靈藥即ち甘露を下す。其れを飲めば永生を得るといふのである。九號の末尾甘露臺の條参考。

いまゝではなにのことももしれなんだこれからさきはみなをしへるでいまゝではみなのことゝろとうちなるのこゝろがおふいちがいなれども



これより先き奈良縣廳では天理王命は有名無實の神なりとし屢々教祖を始め其の弟子を拘留した爲めに秀治氏は恐れて御勤めを止めんとし他の弟子達は進んで御勤めをせうとして教内二派に分れた。

あすにはなんでもたのみかけるでなかみのいちじよふつかねばならん

にちくくにみにさわりつくどくしんせころちがいをかみがしらす  
めへくのみのうちよりもしやんしてころさだめてかみにもたれよ  
なにてもかみのおもわくふかくあるそばなるものはそれをしらすに  
けふまではなによのみちもみえねどもはやくみえるでしやんさだめよ  
このみちをはやくしらそとおもへどもさとりがのふてこれがむつかし  
だんくとふでにしらしてあるけれどさとりないのがかみのざんねん

御筆先を御書きになる動機は始め辻とか仲田とか山中とか云ふ人達に歌で御悟しになつても翌日になると皆忘れて了ふ故其れなら筆に記して置くと云つて記し始められたのが御筆先である。

なにてもかみのゆうことしかときけみなめへくのころしだいや  
しんじつにころいさんでしやんしてかみにもたれてよふきづとめを  
このはなしなにのことやおもふなよこゑいちじよふのはなしなるぞ  
や

こゑやとてなにがきくとはおもふなよころのまことしんじつがきく  
肥料のお授けと云ふのは糖三合、灰三合、土三都合合せて九合を調合して用ゐる時  
は一駄の肥料に相當すと云ふのであるがこれも御供と同じく此等の物質が利くので  
はなく心の誠眞實が利くのである。

しんじつのことろみさだめついたならいかなしゆこふもするとおもへ



よ

しかときけよろづのことをみなをしへどこにへだてはさらにないぞや  
どのよふなところのひとがでゝきてもみないんねんのものであるから  
にんげんをはじめだしたるやしきなりそのいんねんであまくだりたで  
このさきはせかいちゆうをいちれつにたすけしゆごふをみなをしへる  
で

だんくさよろづたすけをみなをしへからとにほんをわけるばかりや  
にちくくからとにほんをわけるみちかみのせきこみこれがいちじよ  
ふ

このみちをはやくわけたることならばあとのよろづはかみのまゝなり

けふのひはなにかめづらしはじめだしよろづいんねんみなついでくる  
いんねんもおふくのひとであるからにどこにへだてはあるとおもふな  
このよふをはじめたかみのことならばせかいちれつみなわがこなり

此の世とは子の用といふことである。子供即ち人類の爲めに日々御苦勞下さる神の  
大恩思ふべきなり。

いちれつのごどもかわいゝそれゆへにいろくこゝろつくしきるなり  
このごどもなにもをしへてはやくくかみのこゝろのせきこみをみよ  
だんくごどものしゆせまちなねるかみのおもわくこればかりなり  
ごどもさへはやくおもてへだしたならからをにほんのちいにするなり  
しんじつにごどものこゝろしかとせよかみのこゝろはせくばかりやで



にちくにかみのせきこみこのなやみはやくたすけるもよふしてくれ  
うちなるはかみをおもふていづみあるこわみないぞやかみのうけやい

當時弟子達は皆な官憲を恐れていづみ居たる故此の言葉あり。

いままでとみちがかわりてあるほどにはやくせきこみおふかんのみち

天理教では教祖の出現迄を一世の世界(舊世界)と云ひ教祖出現以後の世界を二世の  
世界(新世界)と云ふ。天理教は其れ自身を二世の立て換への教と云ふ。蓋し世界の  
轉化期の宗教たることを意味するのである。往還の道さは舊世界の舊宗教を細道と  
して其れ自身を往還の道と云ふのである。

このみちはいつのことやおもてあるはやくで、みよもふいまのこと  
だんくとふでにしらしてあるほごにはやくころにさとりとるよふ  
これさいがはやくさとりがついたならみのうちなやみすきやかになる

つとめでもはじめてをどりまたかぐらちよとのほそみちつけてあれど  
も

教祖が勤めをせよくと云はれても弟子達は官憲を憚つて遠慮してゐると

「神樂勤め計りが勤めでない。心の勤めをせよ」

と云はれたがお手振やお神樂はこれ第二義の勤めである。

だんくとくさがしげりてみちしれずはやくほんみちつけるもよふを

本道とは第一義的信仰(理の信仰)をいふ。

にちくにくろいさんでせきこめよはやくほんみちつけたことなら  
しんじつにこのほんみちがついたならすゑはたのもしよふきづくめや  
むらかたはなをもたすけをせへてゐるはやくしやんをしてくれるよふ  
せかいちうかみのたあにはみなわがこいちれつはみなおやおもへよ



神の田とは主として肉體のことをさされたものである。(御神樂歌七下り目参照)

せかいぢうせきよふとしてはじめかけといてきかするきよにいくなり

此の道は話し一條が助け一條とお聞かせになつてゐるが道の發端は話し一條(説教)から始まつたからかく云ふ。

いかほどにみえたることゝゆうたとてもとをしらねばわかるめはなしだん／＼とないことばかりゆいをいてそれでたならばこれがまことやいちれつにかみにもたれるこのことはやくおもてへでるもよふせよしんじつにおもてよふとおもふならこゝろしづめてしんをたづねよこのこごもしんじつよりもむねのうちみさだめつけばいかなもよふも

にち／＼にかみのこゝろはせきこめごこものこゝろわかりないのでこごももちよとのひとではないからにおふくのむねがさらにわからん

いまではがくもんなどこゆうたとてみえてないことさらにしろまい

世間には學問を唯一の標準として天理教の價値を定めやうとするものがあるが學問は漸く僅々四千年以來の發達である。然るに天理教は學問のない以前の教であり學問の力の及ばぬ未來の教である。

このさきはみえてないことだん／＼とよろづのことをみなといてをくこれからはこのよはじめてないつとめだん／＼をしへてをつけるなりこのつとめせかいぢゆうをたすけみちおしでもゝのをゆわすことなり口あつても心の働きなくば啞も同然である。天理教は單に生理的に口の利けない啞



に口を利かす計りでなく口あつて心の働きなきものに口を利く丈けの力を與へる宗教である。

にちく／＼につとめのにんじゆしかとせよころしづめてはやくてをつ

このつとめなにのこゝろやおもてゐるせかいおさめてたすけばかりをこのみちがはやくみえたることならばやまいのねへはきれてしまふでしんじつのこゝろしだいにいづかたもいかなしゆごふもせんとゆわんで

いまのみちかみのせきこみうちなるはあんじないぞやしかとみていよこれまでとみちがゝわるとゆふてあるかみはちがうたことはゆわんで

このさきはかみのこゝろのせきこみをくちではどふむゆふにゆわれんいかほごにむつかしことゝゆふたととどかずにてはわかるめはなしにちく／＼にかみのおもわくだん／＼とといておくぞやこれきいてくれこのみちはなにかめづらしむつかしいみちであるぞやたしかみてゐよこのみちをどふりぬけたらそのさきはからはほんのちいにしてあるからのちをにほんのちいにしたならばこれまつだいのいきどふりなりこのよふをおさむるもかみてんもかみかみとかみとのこゝろわけるでだん／＼とみえんことをばゆいをいてさきでみえたらこれがかみやで

一日弟子が神の姿の有無を尋れた時教祖は之れに答へて

「有ると云へば有る。無いと云へば無い。願ふ所の誠から見える利益が神の姿やで」



といった。其れとこれと同一意味である。

いかほどにみえたることをいふたとてさきでみえねばわかりあるまい  
これからはせかいぢゆうのむねのうちかみしもともにわけてみせるで  
これを見よせかいもうちもへだてないむねのうちよりそふじするぞや  
世界は未信者、内は信者

このそふじむつかしことであるけれどやまいといふはないとゆておく  
どのよふないたみなやみもでけものもねつもくだりもみなほこりやで  
今日の疾病に對する大なる誤解は其れをもつて單なる生理的故障となすことであ  
る。これを天理教より云へば疾病不幸は皆心理的の故障の表れであるのである。

このよふをはじめてからになにもかもかみへおしへたことはあるまい  
このたびはなにかよろづをかみたるへしらしておいたことであるなら

それからはみなにはしやんするであろみなよりよふてはなししたなら  
そのなかにしんじつこゝろたのもしいおもてしやんをするものもある  
このみちをかみへとふりたことならばかみのじゆうよふすぐにあらわ  
す

天理教が日本の國教となつた曉には神の自由用不思議を表すといふ豫言である。

このよふをはじめたかみのちうよふをみせたることはさらにないので  
なにゝてもしらんあいだはそのまゝやかみのぢゆうよふしらしたるな  
ら

これきいてみないちれつはしやんせよなにかよろづはこゝろしだいや  
けふのひはなにかみえるやないけれどろくがつをみよみなでかけるで



いまゝではたかやまやといふていたたにそこにてはいけんばかりを  
これからはたかやまにてもたにぞこもとはじまりをゆふてきかする  
このよふのはじまりだしはごろのうみそのなかよりもどじよばかりや  
このごちよなにのこゝやおもてゐるこれにんげんのたねであるぞや

問題は此處にある。これを今日より見れば人間の種即ち人類の祖先は鱧であつたと  
解いても何の不思議もないけれども今から三四十年前以前の科學思想の發達しない當  
時にあつてはこれは中々重大問題として信徒未信徒の間に取り扱はれたのである。  
其れで今でも科學思想のない古い人達は御筆先には此ういふことが書いてあるから  
これを發表すると世間の誤解を招くからと云つて引つ込んで了ふがこれは三四十年  
以前の進化論も何も傳はらぬ以前のことであつて今日では天理教はこれあるが爲め  
に却つて眞實をますのである。尙ほこれについて疑問あらば拙著天理教の新創世説  
の解説並に批判参照。

このものをかみがひきあげてしもてだんくしゆごふにんげんとな  
し

それよりもかみのしゆごふとゆふものはなみたいてへなことでないぞ  
や

このはなしちよとのことやおもふなよせかいちれつたすけたいか  
ら

にちくにかみのころのしんじつはふかいおもわくあるとおもへよ  
いまゝでははんがからにしたがうてまゝにいられたかみのざんねん  
このかやしかみのはたらきこれをみよいかなものでもまねはでけまい  
いかほどのごふてきたるといふたごてかみがしりぞくこれかなうまい



なに、てもみないちれつはこのとふりかみがじゆうよふするとおもへよ

しやんせよわかきとしよりよわきでもこゝろしだいにいかなじゆうよふ

いま、でにおなじくらしいたるともかみのじうよふしりたものなし  
これからはよろづのことをみなとくでこゝろちがいのないよふにせよ

御筆先 四號終

御筆先 五號

明治七年(教祖七十七歳の御時)五月より御書取

いま、ではぎうばといふてま、あれどあとさきしれたことはあるまい

人間の中罪の重い者は來世は牛となつて生れる。牛より馬となり馬より犬となり犬より元の人間に歸る。歸つても愚鈍にして一生馬鹿で通らなければならぬ。其れで牛三代馬三代犬三代素馬鹿一代荒々十代通らなければ元の人間に歸ることが出来ぬ。

このたびはさきなることをこのよからしらしておくでみにさわりみよ  
さきなることは未來の事である。

このよふはいかほどわがみおもふてもかみのりつぷくこれはかなはん



めへく／＼にわがみしやんはいらんものかみがそれく／＼みわけするぞや  
ひとやしきおなじく／＼しているうちにかみもほとけもあるとおもへよ

人間は淺薄なものであるから人間の形さへして居れば皆同じ人間の様に思ふたれども人間程階級のあるものはない。此うして地場と云ふ一屋敷に暮らしてゐる中にも人間もあれば神佛もある。又た牛馬に墮つる魂もある。其の區別は人間には出來ない。神が其れく／＼見分けするのであるといふのである。

これを見ていかなものでもとくしんせせんとあくとをわけてみせるで  
このはなしみないちれつはしやんせよおなじこゝろはさらにあるまい  
おやこでもふうふのなかもけふだいもみなめへく／＼にこゝろちがふで  
せかいぢうどこのものとはゆわんでなこゝろのほこりみにさわりつく

何處のものとも云はんは誰彼の區別なくと云ふことである。

みのうちのなやむことをばしやんしてかみにもたれるこゝろしやんせ  
どのよふなむつかしことゝゆふたとてかみのぢうよふはやくみせたい  
いまゝではかみのぢうよふしんじつをしりたるものはさらにないので  
これからはいかなむづかしやまいでもこゝろしだいになをらんでなし  
しんじつのことゝろをかみがうけとればいかなぢうよふしてみせるでな  
こらほどのかみのしんじつこのはなしそばなるものはやくさとれよ

神は人間が可愛いから疾病不幸の原因を説いてお聞かせになるのである。其れを天  
理教は愚夫愚婦の宗教だなどと云つて輕蔑してゐるのは物の道理を無視してゐるの  
である。物の道理を無視することは神の恩寵を我と我が手でこぼす様なものであ  
る。

これさいがはやくさとりがついたらなにゝついてもみなこのとふり



けふまではなによのこともせかねどももふせきこんでおふかんのみち  
このみちはせかいなみとはおもふなよこれまつだいのこふきはじまり  
このにんずごにあるとはゆわんでなみのうちさわりみなくなるである  
このさわりてびきいけんもりつぶくもみなめんくにしやんしてみよ  
このはなしなんとおもふてきいてゐるかわいあまりでくどくことなり  
どのよふにいけんりつぶくゆふたごてこれたすけんとさらにゆわんで  
にんげんのわがこのいけんおもてみよはらのたつのもかわいゆへから

有難いお言葉である。

しやんしてこゝろさだめてついてこいすゑはたのもしみちがあるぞや  
いまゝではこゝろちがいありたとてひがきたらんでみゆるしていた

このたびはなんでもかでもむねのうちそうじをするでみなしよちせよ  
むねのうちそうじをするとうふのもなかみのおもわくふかくあるから  
このそふじすきやかしたてせんことにむねのしんじつわかりないから  
このこゝろしんからわかりついたらこのよはじまりてをつけるなり  
ちかみちもよくもこふまんなきよふにたいひとすじのほんみちにでよ

近道は迷信。慾と高慢は埃の根元。一筋の本道は天理人道の信仰即ちこれである。

このみちについたるならばいつまでもこれはにほんのこふきなるぞや  
にほんにもこふきができたことならばなんでもからをまゝにするなり  
このよふをはじめてからのしんじつをまだいまゝではゆふたことなし

世間では天理教は譯の分らぬことを云ふと云つてゐる。其の譯の分らぬ所に天理教



の價值がある。此の創世の事實の如き最も其うである。世間では今迄ないことを云ふから譯の分らぬ様に思ふけれども此處に却つて天理教の根の教元の教員の教止めの教たる價值があるのである。

このはなしむつかしことであるけれどゆわずにいればたれもしらんでだん／＼とどのよなこともゆてきかすこゝろしづめてしかときくなりいま／＼ではいかなるほふとゆふたとてふこれからはほふはきかんで御嶽行者の大先達の告白に三十年程前には法術を行へば其れ丈けの利益があつたが此の頃は幾ら熱心にやつても駄目だと云ふ。最う法術の時代ではないからである。これまでは忍ださきにてはほふなど、おしへてあれどさきをみてゐるよにほんにはいま／＼でなにもしらいでもこれからさきのみちをたのしめほふやとてたれがするとはおもふなよこのよはじめたかみのなすこと

どのよふなむつかしこと、ゆふたとてかみがしんじつうけとりたならいま／＼ではからやにほんどゆふたれどこれからさきはにほんばかりや今迄はは舊世界のことを云ふ。これからは新世界のことを云ふ。新世界では日本とか外國とか云ふ區別をとつて世界即日本、日本即世界にする云ふ神意である。忍ださきはおふきにみえてあかんものかまへばおれるさきをみてゐるよもとなるはちいさいよふでねが忍らいどのよなことももとをしるなりちつやとてほうが忍らいとおもふなよこゝろのまことこれがしんじつ

智巧方便は末である。眞實誠は本である。此の世に何が大きなりと云つても眞實誠の一念より大なるはない。胸に眞實誠があれば何んなことでもこれ出来ないといふことはない。

にんげんはあさないものであるからにめづらしことをほふなぞとゆふ



いま、ではかみがあらわれでたるとてまだしんじつをしりたものなし  
このさきはどのよなこともしんじつををしへておいたことであるなら  
それからはかみのはたらきなにもかもじうよじざいをしてみせるでな  
しんじつのかみのはたらきしかけたらせかい、ちれつこゝろすみきる  
はたらきもいかなることゝおもふかなこゝろうけとりしだいかやしを  
このかやしなにのことやおもふかなみちのりせんりへだてありても  
このことはなにをゆうてもおもふてもうけとりしだいすぐにかやしを  
このかやしなんのことやおもふなよせんあくともみなかやすでな

御授訓。天の理なれば即ぐと受け取り即ぐと返やすが一つの理。

よきことをゆふてもあしきおもふてもそのまゝすぐにかやすことなり

このことをみえきたならばいぢれつはどんなものでもみなすみわたる  
けふのひはなにかみえるやないけれどはちがつをみよみなみえるでな

此の八月は舊の八月にて新の十月に警官が突然やつて来て勤場所の簾、幣、鏡等を没  
收し村總代に預けて行つた。其の日又た石上神社の神官が辨難に來た。これより先  
き若江村の松尾市兵衛が或る所で神社の説教を妨害して神官を困らせたことがあ  
る。其の爲に地方の神官四五十人が大和神社へ寄つて其の復讐策に就て會議した。  
警官が來たのも神官が來たのも其の結果らしい。其れで「よきことをいふてもあし  
きおもふてもそのまゝすぐにかやすことなり」と仰せられたのである。

みえるのもなにのことやらしろまいなたかはやまからおふかんのみち  
高い山は神官や警官のことをいふ。往還の道は天理教のことをいふ。

このみちをつけよふとてのしたしらべそばなるものはなにもしらずに  
このとこへよびにくるのもでゝくるもかみのおもわくあるからのこと



此の年の十一月十五日に山村御殿にて取り調べがあつた。其の事を云つてゐられるらしい。

そのことをなにもしらずにそばなるはせかいなみなることをおもふてなにもせかいなみとはおもふなよなにかめづらしみちがあるぞやだんくこのよはじめてひはたてごたれかしんじつしりたものなしいかほごにかみのこゝろはせいたとてみなのことろはまだうつかりとはやくとしやんしてみてせきこめよねへほるもよふなんですていん  
教祖は良く弟子に向つて「根を堀れく」と仰せになつたが當時は未だ信仰が幼稚な爲め誰も根を堀るものがなかつた。

このよふのしんじつねへのほりかたをしりたるものはさらにないのでこのねへをしんじつほりたことならばまことたのもしみちになるのに

此の世界の人間が自分達の慾の爲めに親が子を殺し、子が親を殺していぢらしくて見てゐられん。これと云ふのも元を聞かしたことがないからである。其れで何うしても元を聞かせればならんと云つてお説きになつたのが古記である。天理教が人心を根本的に救ふ力は此の古記にある。

このみちをほりきりとふりぬけたならかみしもごもにこゝろいさむにこれからはなんでもせかいいちれつをいさめるもよふばかりするぞやだんくとなにごとにてもにはんにはしらんことをばないさゆうよになにもかもせかいちうへをしへたいかみのおもわくふかくあるからそれしらすせかいちゆうはいちれつになんどうぶなきよふにおもふてごのよふなごでもかみのゆうことやなんのあぶなきごがあるぞや

天理教の信仰は助かる教で亡びる教ではない。



なにもかもよろづのことをだん／＼とゆふてゐながらわかりたるなし

當時弟子達は口では色々の事を云つてゐるが本當に教理がわかつてゐなかつたから此のお言葉があつたのである。

これからはごぞしんじつむねのうちはやくすまするもよふしてくれ  
せかいちうおふくのひとであるからにこれすまするがむつかしきこと  
いかほどにむつかしごと、ゆうたとしてわがころよりしんじつをみよ  
このころすましわかりたことならばそのまゝみえることであるなり  
にち／＼にかみのしんじつはたらきをしりたるものはさらにあるまい  
なに／＼もかみのちうよとゆふものはめづらしことをしてみせるでな  
ごのよふなめづらしことをゆふたとてかみのすることなすことばかり

いま／＼ではなによのこともしらなんだちよごみえかけたほそいみちす  
じ

このみちをだん／＼したい／＼ならばなんでもむこにみえるほんみち  
これまでにとふりてきたるみちすじはからもにほんもわかりないので  
このさきはなんぼからやとゆふたとてにほんがまけるためしないぞや  
このよふのものはじまりのねをほらばちからあるならほりきりてみよ  
このねへをほりきりさいがしたならばどのよなものもかなうものなし  
しかときけくちでゆうてもおもふてもどこでゆうてもおもふたるとて  
そのまゝにかやしとゆふはこのことやかみがしりぞくみなしよちせよ



御筆先 五號終

御筆先 六號

明治七年(教祖七十七歳の御時)十二月より御書取

このたびはめづらしことをゆひかけるころしづめてこれきいてくれ  
なにごともかみのすることゆふことやそばにしんぱいかけることなし  
このはなしどふぞしんじついちれつはころしづめてしよちしてくれ  
このみちはごふいふことにおもふかなこのよおさめるしんじつのみち  
かみたるはひいとみづとをわけたならひとりおさまるよふきづくめに

一本かみたるのに作る。

このひみづわけるといふはこのところよふきつとめをするとおもへよ



このよふをはじめかけたもおなじことめづらしことをしてみせるでな  
このよふをはじめてからにないつとめまたはじめかけたしかおさめる  
このよふのつきひのころしんじつをしりたるものはさらにあるまい  
これまではいかなるかみといふたとてめへにみえんとゆふていたなり  
このたびはごのよなかみもしんじつにあらはれだしてはなしするなり

十柱の神がお地場に表はれ給ふを云ふ。

いまからはなにをゆふてもおもふてもそのまゝみえるこれがふしぎや  
なにもかもあきをあいづにみえかけるよふきづとめにはやくかゝれよ  
此の秋教祖には奈良監獄へ拘留せられた。

せかいぢうおふくくらするそのうちはいぢれつはみなもやのごとくや

にち／＼にすむしわかるしむねのうちせへじんしだいみえてくるぞや

日々に心が澄んで來又た分かつて來て成人次第色々のことが見えて來るといふことである。

このみちがたしかみえたることならばこのさきたしかたのしんでるよ  
だん／＼とこゝろいさんでせきこめよはやくほんみちいそぎでるぞや  
しんじつのつとめのにんずじふにんこのころをかみがうけとりたなら  
それからどのよなこともだん／＼とかみのおもわくみなときゝかす  
にち／＼にかみのこゝろはせへたとてにんずじふにんそろいなけねば  
じふにんのうちにさんにんかたうではひみづかせともしりぞくとしれ  
若江の市兵衛(松尾)龍田の勘兵衛、大西の勘兵衛(北野)の三人の死せることを云ふ。  
ごのよふなことでもかみのすることやこれをやまひとさらにおもふな



なにかもしんじつかみのちうよふをしらしたいからしてみせるでな  
これまではいかなるみちをどふりてもひがきたらんでいづみゐたなり  
このさきはどのよなこともだんく〜とほんしんじつをゆふてきかする  
いま〜ではいかなるかみもやまく〜におがみきとふとゆふたなれども  
このもとをしりたりものがあるならばたづねいでみよかみがゆるする  
まださきはどのよのこともだんく〜とほんみちつけたことであるなら  
いま〜でにないことばかりゆいかけるよろづたすけのつとめをしへる  
このつとめじふにんにんすそのなかにもとはじまりのおやがいるなり  
いざなぎといざなみいとをひきよせてにんげんはじめしゆごふをしへ  
た

このもとはどろうみなかにうをとみとそれひきだしてふうふはじめた  
このよふのもとはじまりはどろのうみそのなかよりもどじよばかりや  
そのうちにうをとみいとがまじりゐるよくみすませばにんげんのかほ  
それを見ておもひついたはしんじつのつきひのこゝろばかりなるぞや  
このものにどぶぐをよせてだんく〜としゆごふをしへたことであるな  
ら

どぶぐは六人の道具衆を云ふ。

このどぶぐくにさづちいとつきよみとこれみのうちへしこみたるなら  
くもよみとかしこねい〜とおふとのべたいしよくてんとよせたことな  
ら



それからたしかせかいをはじめよとかみのそふだんしまりついたり  
これからはかみのしゆごふとゆふものはなみたいてへなことでないぞ  
や

いまゝでにないことばかりはじめるはなにをゆうのもむつかしきこと  
このよふをはじめかけたるしんじつをたれかしりたるものはあるまい  
これからはどのよなこともだん／＼とゆふてきかするうそとおもふな  
にんげんをはじめかけたはうをとみとこれなはしろとたねにはじめて  
このものにつきひたいないりこんでだん／＼しゆごふおしへこんだ  
で

このこかずくをくくまんにくせんにくひやくくじふにくにんなるぞ

や

このにんをみつかみよさにやどしこみさんねんみつきとゞまりてゐた  
それよりもうまれだしたはぶからやぶ／＼としてせへじんをした  
このものにいちどをしへたこのしゆごふおなじたいないさんとやどり  
た

このよふのしんじつのかみつきひなりあとなるはみなどふぐなるぞや  
にんげんをはじめよふとてだん／＼とよせてつかふたこれにかみなを  
いざなぎといざなみいとがいちのかみこれてしよふこのだいじんぐな  
り

古事記や日本書紀の誤りは天照皇大神宮を單稱の神であると思つてゐることであ



る。これは單稱の神でなくて複稱の神である。即ち人類の原父伊邪那岐命(天照皇大神宮)と人類の原母伊邪那美命(天照大神宮)が日本上代に再び國祖となつて表はれ此の世界を統治せられたのである。其れが天照皇大神宮(伊勢内宮)と天照大神宮(伊勢外宮)が類似の神名であつたから混同して一人の神と思つたのが誤解の始まりである。(神代の男女相偶神は皆類似の名前をもつてゐる)今日の天理教徒で知つてゐる人は少いがお地場には天之石屋戸(天の岩戸)のあつたことを教祖はお説きになつてゐる。又た段々先きに行けば此のお地場に元大神宮のお札のかゝることも豫言せられてゐる。天之石屋戸とは數多の岩戸と云ふことにして現今天理教本部祖靈殿のある場所である。此處に天照皇大神宮御夫婦が御籠りなされたのである。

今日では伊勢の内宮を女神とし外宮を男神として祭つてゐるがこれは大なる誤りである。本當を云へば其の反對になるべきものである。其れから今日の人間は何故天照皇大神宮が皇國第一の神であるか其の理由を知らない。これは元人間を生んだ親であるからである。尙ほ詳細の研究は近々發表する御筆先の研究及び其の他に發表

する心算である。

まださきはなにかだん／＼とくけれどいま／＼でしらんことばかりやでこのさきはなにをゆうてもにんげんをはじめかけたることばかりやでこのよふをはじめだしたるやしきなりにんげんはじめもとのおやなり

前者は中山家を云ひ後者は教祖を云ふ。以下十二月廿一日よりのお話。

つきひよりそれをみすましあまくだりなにかよろづをしらしたいからしんじつにつきひのこゝろおもふにはめ／＼のやしるもろたことなら

それよりもじゆよじぎいにいつなりとおもふまゝなるはなししよものいま／＼のつきひのやしるしいかりともろてあれどもいづみゐたなり

身上は神の建て流しの館。心澄み切れば神同體。



このたびはたしかおもてへあらわれてなにかよろづをみなゆてきかす  
いまゝではみずのうちらにゐたるからなによのこともみえてなけねど  
天啓に依れば九億九萬年は水中の棲ひであつた。従つて人類が陸上生活を始めたの  
は最近壹萬年である。

このたびはあかいところへでたるからごのよなこともすぐにみえるで  
あかいところは明るい所即ち陸上生活と精神界の大道とを兼ねて云ふ。

このあかいきものをなんとおもてゐるなかにつきひがこもりゐるぞや  
これより先き神棚に鏡と簾と幣とを祭つてゐたが警官の爲めに取り拂はれたから  
教祖は黒衣を廢して赤衣を召し三寶に赤衣をのせて神を拜された。赤衣を召された  
譯は赤衣には月日(月日は天地の眼である)が籠つて居る故如何なる所も照覽せざる  
はないからである。

いまゝでもつきひのまゝであるけれどひがきたらんでみゆるしてゐた

このたびはもふじゆぶんにひもきたりなにかよろづをまゝにするなり  
それしらずたかやまにてはなにもかもなんとおもふてまゝにするぞや

これは警官の横暴を仰せられたのである。

なにごとものところにはにんげんのころはさらにあるとおもふな  
ごのよふなことをゆふにもふでさきもつきひのころさしづばかりで  
たかやまはなにをゆふてもおもふにもみなにんげんのころばかりで  
つきひよりつけたるなまいとりはらいこのざんねんをなんとおもふぞ  
月日より附けたる名を取り拂いと天理王命と云ふことを差止めたことを云ふ。

しんじつのつきひりつぶくざんねんはよいなることでないとおもへよ  
いまゝではたかやまやとはびかりてなにかよろづをまゝにしたれど



これからはつきひかわりてまゝにするなにかのことをまねをしてみよ  
このところなにをゆふにもなにごともつきひのおもふことばかりやで  
これからはつきひのこゝろざんねんをはらするもよふばかりするぞや  
このさきはごのよなほこりたつとてもこれをやまひとさらにおもふな  
いまでもつきひざんねんやまゝにつもりてあるをかやしするぞや  
いまでもかやしといふてといたれどなんのことやごおもてゐたなり  
しんじつにかやしといふはこのことやたかやまはみなしよちしてゐよ  
このよふはごろうみなかのことなるはなかにつきひがゐたるまでやで  
つきひよりしんじつおもひついたるはなんとせかいをはじめかけたら  
ないせかいはじめかけるはむつかしいなにとどふぐをみだすもよふを

みすませばなかにごぢようをどみとほかなるものもみえてあるなり  
そのものをみなひきよせてだんじやいにんげんしゆごふはじめかけた  
ら

ないせかいはじめよふとてこのつきひだんゝこゝろつくしたるゆへ  
このみちをしりたるものはさらになしつきひざんねんなどおもふぞ  
これほどにおもてはじめたこのせかいつきひのこゝろなんとざんねん  
つきひよりだんゝこゝろつくしきりそのうへなるのにんげんである  
それしらすいまのところはたかやまはみなはびかりてまゝにしてゐる  
このつきひだいゝちこれがざんねんなどんなかやしをするやしれんで  
このせかいやまぐゑなぞもかみなりもじしんおふかせつきひりつぶく



ごのよふなたいしやたかやまゆだんしななんどきつきひとんでゝるや  
ら

明治七年の迫害には神官（官幣大社石上神社の神官、官幣大社大和神社の神官等其の  
主なるものであつた）や警官が組んで来たから此の言葉があつたのである。たい  
しやは即ち大社。たかやまは即ち高山にて此處では地方廳や警察のことを云ふ。

いちれつはみなくわがみきをつけよつきひるんりよはさらにないぞ  
や

なにもかもせへいつぱいにことわりてそれからかゝるつきひしごとを  
どのよふなこともうらみにおもふなよみなめへくのみうらみである  
このはなしだんくどきつめてあるこれしいかりときゝわけてくれ

いちれつはみなめへくのむねしだいつきひみわけてゐるとおもへよ  
つきひよりしんじつころみさだめてうけとりしだいかやしするなり  
いまではなにをゆふてもおもふてもみなにんげんのころばかりで  
これからはよきことにてもあしきでもそのまゝすぐにかやしするなり  
いまではなにかさとりもありたれどもふこれからはさとりないぞや  
このよふはしんじつのおやつきひなりなにかよろづのしゆごふするぞ  
や

このさきはなにをゆふてもうそはないみなしんじつとおもてきゝわけ  
ごのよふなことでもつきひしんじつにおもてはじめたことばかりやで  
いまではやまひとへばいしやくすりみなしんぱいをしたるなれど



も

これからはいたみなやみもでけものもいきてをとりでみなたすけるでこのたすけいまゝでしらぬことなれどこれからさきはためししてみよどのよふなむつかしくなるやまひでもしんじつなるのいきでたすけるつきひよりしんじつこゝろみさだめていかなるしゆごもするとおもへよ

うまれこふほうそはしかもせんよふにやまずしなすにくらすことならしかときけいかなぢうよふするどてもつきひのこゝろばかりなるぞやいまゝでもたいてくどきもとひたれどまだゆいたらんつきひおもわくこのたびはなにかつきひのざんねんをつもりあるからみなゆふておく

このところたすけいちじよとめられてなんでもかやしせずにおもはれんこのかやしたいしやたかやまとりはらいみないちれつはしよちしてゐよ

明治七年の迫害には官幣大社石上神社の神官官幣大社大和神社の神官等が主唱者となつて警察や縣廳を煽動して來たから特に此の御言葉があつたのである。

このはなしなんとおもふてきてゐるてんぴひのあめうみはつなみやこらほどのつきひのこゝろしんじつをせかいぢゆうはなんとおもてるだんくごくどきなげきはとくけれどしんじつなるのこゝろたすけるどのよふなものいちれつわがこなりつきひのこゝろしんぱいをみよこのよふはいちれつはみなつきひなりにんげんはみなつきひかしたもの



せかいちうこのしんじつをしりたならごふきごふよくだすものはない  
ころさいしんじつよりもわかりたらなにもこわみもあぶなきもない  
つきひよりおしへることはみなけしてあとはにんげんころばかりで  
いまでもこのよはじめたしんじつををしへておことおもたなれども  
つきひよりちくころせきこめどくげんまちてゐるとおもへよ  
このはなしなんとおもふてきてゐるつきひおもわくふかいりやくを  
こればかりひとなみやとはおもうなよつきひのしごとゑらいおもわく  
つきひよりちうよじざいとまゝとけどまだいまではみえたことなし  
このたびはちうよじざいをしんじつにしてみせたならこれがまことや  
どのよふなことをするのもしんじつこのろしだいにみなしてみせる

たいないへやどしこむのもつきひなりうまれたすのもつきひせわどり  
このたびはどのよなこともしんじつにみなあらわれてしてみせるでな  
これを見ていかなものでもとくしんせころしだいにいかなじゆよふ  
どのよふなことをするのもしんじつこのろしだいにみなしてみせる

御筆先 六號終



# 御筆先 七號

明治八年(教祖七十八歳の御時)二月より御書取

つきひよりさんじゆはちねんいせんにてあまくだりたるもとのいんねん

つきひよりそのいんねんがあるゆへになにかいさいをはなしたいから  
かみたるはそれをしらすになにごともせかいなみやとおもてゐるなり

此の度神が天降つて根の教、元の教、實の教、止めの教を説いて聞かすのに官憲は  
神の深い慈悲も知らず天理教の價値も知らずこれをもつて在來の淫祠邪教と同一視  
しつゝあることを慨嘆せられたのである。



このところもとなるぢばのことならばはじまりだしをしらんことなし  
かみたるへこのしんじつをはやくとしらしてやろとつきひおもへど  
かみたるはそれをしらずにめへくのわがみしやんをばかりおもふて  
つきひにはだんくみえるみちすじにこわきあぶなきみちがあるので  
つきひよりそのみちはやくしらそふとおもてしんばいしてゐるとこぞ  
にんげんのわがこおもふもおなじことこわきあぶなきみちをあんじる  
それしらすみないちれつはめへくにみなうつかりとくらしゐるなり  
このせかいなにかよろづをいちれつにつきひしはいをするとおもへよ  
このはなしどふゆふことにおもふかなこれからさきのみちをみてゐよ  
どのよふなたかいやまでもみづがつくたにぞこやとてあぶなきはない

天地私載なく日月私照はない。何んな王侯貴族でも心得違があつては叶はぬ。又た  
何んな下等社會の人間でも信心次第で何の様な御守護も頂ける。

なにもかもつきひしはいをするからはおふきちいさいゆふでないぞや  
これまでもなんでもよふきほしいからたいてたづねていたるなれども  
このたびはたにぞこにてはちよとしたるきいがたあぷりみえてあるな  
り

このきいもだんくつきひていりしてつくりあげたらくにのはしらや  
それからはちくつきひみさだめてあとのよふきのもよふばかりを  
それよりもひねたきいからだんくとていれひきつけあとのもよふを

ひねた木からだんくとは心の曲つた人間からだんくと云ふ意味である。



にちく／＼につきひおもわくふかくあるおなじどころにはんさんぼん  
おなじところに二本三本は一軒の家に二人三人とも一村の内二人三人ともとれ  
る

このきいもめまつおまつはゆわんでないかなるきいもつきひおもわく  
神の御用には男も要れば女も要る男女の區別はないとの意味。

このあとはなにのはなしをするならばよふきのもよふばかりゆふなり  
よふきは用木即ち神の御用を勤むる人間を云ふ。

よふきでもちよとのことではないからにごじゆろくじゆのにんずうが  
ほし

一本にんずがほしい。

このにんもいつ／＼までもへらんよふまつだいつ／＼ききられめなきよふ  
こらほどにおもふつきひのしんじつをみなのことろはなにとおもふや  
どのよふなくどきはなしをするのもなたすけたいとのいちじよばかり  
で

いちれつのむねのうちよりしんじつにはやくわかりたことであるなら  
それからはつきひよろづのしはいするなにかよろづのたすけするぞや  
このたすけはやくりやくをみせたさにつきひのことろせくばかりやで  
なにもかもこのせきこみがあるゆへにむねのうちよりそふじいそぐで  
このはなしどこのことやとおもふなよみなめへ／＼のうちのはなしや  
めへ／＼にむねのうちよりしいかりとしんじつをだせすぐに見えるで  
つきひよりこのせきこみがあるゆへになにかこゝろはいそがしいこと



これさいがはやくちうよふみせたならつきひのころひとりいさむに  
いまでもいまがこのよのはじまりとゆうてあれどもなんのことやら

天地が第二の創造に入れりとの豫言

このたびのじゆよじぎいでとくしんせいまゝでこんなことはしろまい  
つきひよりたいたいよりもいりこんでじゆよじぎいをみなしてみせる  
ころほどのじゆよじぎいのしんじつをはなしするのはいまはじめやで  
このさきはいつになりてもこのとふりじゆよじぎいをはやくしらす  
いまでもいかなるみちもとふりたがおびやたすけのためしはじめや

今迄色々の宗教もあつたけれども産屋助けと云ふは今が始めてあるとの意味。産  
屋助けと云ふは産屋自由用延ばしなりと縮めなりと心次第。又た産後は三日目から  
働くことが出来るると云ふ不思議な助け。これを此の度元の親が表れて教をとく證據

として始められたのである。今日でも此の不思議なお助け有難いお助けのあること  
を知らぬものゝ多いのは残念である。

このたびはおびやたすけのしんじつをはやくたすけをつきひせけども  
いちれつはいまゝでしらんことやからみなじいくりといづみゐるなり  
しんじつにころさだめてねがうならじゆよじぎいにいまのまあにも  
このことはたれでもしらぬことやからむねがわからんつきひざんねん  
いまゝではなによのこともみえねどもこれからさきはやくみえるで  
しんじつのころあるならなりとはやくねがへやすくにかなふで  
どのよふなとはいかんとゆわんでなたすけいちじよせへでゐるから  
ころほどにつきひのころせきこめどそばのころはなんですむど



神は人間を助けたいと思つても人間の方で助かる氣がないので困る。

はや／＼とこゝろいさんでせきこめよつきひまちかねこれをしらんか  
つきひよりじゆよじぎいをしんじつにはやくみせたいこれがいちじよ  
ふ

こらほどにおもふつきひのしんじつをそばのこゝろはみなせかいなみ  
どのよふなことをゆうのものにんげんのこゝろではないつきひこゝろや  
いま／＼ではなにをゆうてもにんげんのこゝろがまじるよふにおもふて  
しかときけこれからこゝろいれかへてにんげんこゝろあるとおもふな  
いま／＼ではおなじにんげんなるよふにおもてゐるからなにもわからん  
これからはなにをゆうのもなすこともにんげんなるささらにおもふな

いま／＼ではひがらもちいときたらんでなによのこともひかへいたるで  
このさきとどのよなことをいふにもなこわみあぶなきないとおもへよ  
これからはつきひでばりをするからにどんなことでもかやししてやる  
つきひよりこれまでなるのざんねんはやま／＼つもりかさなりてある  
いかほどにざんねんつもりあるとでもどふせこふせはゆうてないそや  
これからはどのよなたかいたところでもこのしんじつをはやくみせたい  
かみたるのこゝろすみやかかりたらつきひじゆよふはやくするのに  
つきびよりこのじゆよふをせかいぢうへはやくいちれつしらしたいか  
ら

このたびのはらみてゐるをうちなるはなんとおもふてまゝてゐるやら



これは秀治氏の夫人松枝子の妊娠せられたことをいふ。

こればかりひとなみやとはおもふなよなんでもつきひゑらいおもわく  
このものはろくねんいせんさんがつのじふごにちよりむかいとりたで

此の者(一本このもと)とは秀治氏と車屋のおやその間に出来たおしうといふ女子の  
子のことをいふ。この女子は明治八年より六年以前即ち明治三年三月十五日に死亡  
してゐる。故管長中山新治郎氏未亡人中山玉恵子は其の後身である。

それからはいまゝでつきひしいかりとだきしめてゐたはやくみせたい  
それしらすうちなるものはなにもかもせかいなみなるよふにおもふて  
このはなしどふいふにおもふかなこれがだいゝちこのよはじまり  
まださきのみちのよふだいだんゝとよろづのことをみなといておく  
なはたまへはやくみたいとおもふならつきひおしへるてへをしいかり

たまへは即ち玉恵にして故管長未亡人である。生れたのは明治十年。即ち誕生前三  
年以前に此の御豫言があつたのである。

このはなししんじつおもふとならばこゝろさだめてはやくかゝれよ  
いまゝではなにをゆうてもいちれつのむねもわからんひもきたらんで  
だんゝとむねがわかればひもきたるつきひのこゝろゑらいせきこみ  
これさいがはやくみえたることならばどんなものでもかなふものなし  
つきひよりこれをしいかりみせたならあとのしごとはどんなことでも  
いまゝでもおびやほふそのこのゆるしなんとおもふてみながいたやら

教祖神憑後四年目四十四歳の御時に産屋試しの経験を我が身に受けられた。其の時  
は六ヶ月目に分娩し手づから後の御始末をなされた。第二回の帯屋試しは教祖の三  
女春子が長男龜藏を生む時産屋許るしによつて安産をした。此の龜藏(嘉永六年生)



といふのは七歳の時亡くなつたが、其の時教祖は死體を抱きこれは死んだのではない。地場の眞柱として神が貰ひ受けたのだと申された。其の生れ變りが故管長中山新治郎である。前生は教祖の父前川半七正信の魂であるといふ。これが親族に帶出された。これが他人に對して産屋許るしの始まり。

このたびはどんなことでもすぎやかにみなしんじつにゆうてきかする  
これからはおびやたすけをしいかりとせつなみなしにはやくうまする  
だんくごくちでなにごとゆうたどてつきひゆうよにせねばいかんで  
神の言葉通りに信じて疑はなければ安産疑なし。

つきひよりなにのことでもしいかりとゆうよふにせよちがうことなし  
どのよふなたすけするのみなつとめつきひゆうよにたしかするなら

しんじつのことろあるならつきひにもしかどうけやいたすけするぞや  
このたびはたすけするのもしんじつにうけよてたすけいまがはじめや  
こらほどにつきひのことろせへてゐるそばのことろもつとめごしらい  
このもよふなにばかりではないほどにどんなことでもみなつとめやで  
なにばかりとは産屋痘瘡ばかりではないといふ意味。

つとめでもおなじことではないほどにみなそれごととてゑををしへる  
勤めでも雨乞ひのお勤めとか謀叛のお勤めとか皆な手が違ふといふことを仰せられ  
たのである。

いままでのみちのすがらとゆうものはどうゆふみちもしりたものなし  
これからはどのよなみちもだんくごくちとよろづみちすじみなゆてきかす  
つきひよりなににもみちすじきいたならこのざんねんはむりであるまい



つきひよりこのいちじよふをはらしたらあとのころはよふきづくめ  
や

にちくによふきづくめといふのはないかなることやたれもしろまい  
なにもかもよふきとゆうはみなつとめづらしことをみなをしへるで  
だんくどつとめをしへるこのもよふむねのうちよりみなそふじする  
あとなるはにちくころいさむでなよろづのつとめてへをつけるで  
このつとめどふゆふことにおもふかなおびやほふそのたすけいちじよ  
ふ

このたすけいかなることにおもふかなほふそせんよのつとめをしへる  
このみちをはやくをしへるこのつとめせかいちれつころすまする

このはなしどふゆうことにきいてゐるせかいたすけるもよふばかりを  
どのよふなたすけるのもしんじつのおやがあるからみなひきうける  
このことをこれをまことにおもふならまとしんじつころしだいや

ころさいしんじつすんだことならばどんなことでもちがうことなし  
いまではつきひいかほどおもふてもそばのころにわかりないので  
これからはどのよなつとめをしへるもにんげんなるのころではない  
つきひよりどのよなことをしへるでこのよはじめてないことばかり  
にんげんのころでおもふよふなことつきひはなにもゆうでないぞや  
つきひにはどのよなこともちれつにみなにをしへてよふきづくめや  
せかいちうみないちれつはすみきりてよふきづくめにくらすことなら



つきひにもたしかころろがいさむなりにんげんなるもみなおなじこと  
このよふのせかいのころろいさむならつきひにんげんおなじことやで  
此處をよくく玩味しなければならぬ。

御筆先 七號終

御筆先 八號

明治八年(教祖七十八歳の御時)五月より御書取

にちづくにつきひざんねんやま／＼とつもりてあるをはらしたいから  
このはらしつきひおもわくだん／＼となにかよろづのたすけなるのは  
しんじつのころろしだいにどのよふなつとめするのもみなたすけやで  
つきひにはせかいちゆうはみなわがこたすけたいこのころろばかりで  
そのところさしとめられてざんねんなまたそのちはとりはらいまで  
前の年のことを云ふ。

それゆへにたすけつとめがでけんからつきひのころろなんどざんねん



つとめでもつきひだん／＼てををしへにんげんなるのころではない  
どのよふなことをするのみにんげんのころあるとはさらにおもふな  
このところいかなはなしもつきひなりどんなもよふもみなつきひやで  
いかなるのさわりついてにもにんげんのころはさらにあるとおもふな  
このよふをはじめだしたるつきひなりどんなことでもしらぬことなし

神は全知全能である。

せかいちういちれつなるのむねのうちつきひのほふへみなうつるなり  
それしらすみなにんげんのころとてわがみしやんをばかりおもふて  
このさきはみなだん／＼としんじつのみちを／＼しへることであるから  
このよふのはじまりだしはつきひなりなにかいさいをみなをしへかけ

神は宇宙の第一原因である。

それまではたれかしりたるものはなしなにかつきひのしやんばかりで  
けふまでもなによのこともつきひやとゆうてあれどもまだわからんで  
しかときけこのよはじめたしんじつといふてはなしはといてあれども  
せかいはたれかしりたるものはなしなにをゆうてもわかりがたない

凡夫凡婦の常として先入觀念に支配せられて眞實を理解するもの、なきを悲しまれたのである。

そのはづやこのよはじめてないことをだん／＼くどきばかりなるから  
このよふのはじまりだしのしんじつをしらしておかんことにおいて  
いま／＼でもたすけいちじよとま／＼とけどほんしんじつをしらぬことか



ら

今迄も佛教とか基督教とか云ふものがあつても人間は何うして出来たか神と人との關係人と人との關係を知らないから何うしても眞の和合がない。此の度は人間始め世界始めの元始的事實を説き聞かして互ひに和合せなければならぬといふのである。

どのよふなことでもつきひゆうことやこれしんじつとおもてきくなり  
どのよふなこともだんくゆてきかすこれをまこととおもてきくわけ  
このよふのほんもとなるとゆうのはなこのところよりほかにあるまい  
此の所とは地場即ち大和國山邊郡庄屋敷を云ふ。

このはなしどふゆうことにおもふかなごふゆはなしもみなしたいから  
このよふをはじめだしたるしんじつをみないちれつはしよちせゑねば

どのよふなたすけするのもしとなみのよふなることはゆうでないから  
いまうでにみえたることやあることはそんなことをばゆうでないぞや  
これまでにないことばかりゆてきかししんじつよりのたすけするぞや

天理教の特色價值及び使命は此處にある。

このたすけどふいふことにおもふかなほふそせんよのまむりこしらゑ  
まだたすけおびやちうよふいつなりとのばしなりともはやめなりとも  
こらほどのちうよじぎいをゆうのもなよいなることさらにおもふな  
つきひにはたいてころはつくせどもせかいちゆうはまだせかいなみ  
このよふをはじめだしたるほんしんをゆうてきかさんことにおいて  
このところつとめばしよはにんげんをはじめだしたるところなるぞや



勤め場所とは甘露臺靈地を云ふ。

にんげんをはじめだしたるこのおやはぞんめいであるこれがまことや  
教祖のことを云ふ。

このはなしこれをまことにおもふものどこのものでもさらにあるまい  
このよふなういことばかりゆうのはなこれがしんじつみなまことやで  
天理教は荒唐無稽のことを云ふと世間から排斥せられる所に天理教の眞の價値があ  
る。

いまうでもないせかいをばはじめたいしらんことをばをしへはじめて  
このたびもまたないことやしらんことばかりゆううてまたをしへかけ  
どのよふなことでもしらぬことばかりこれをしへるつきひおもわく  
つきひにはだんくしらぬことばかりなにもをしへてせかいたすける

こらほどにおもふつきひのしんぱいをせかいのものはなにもしらすに  
こころさいつきひしんじつうけとればどなたすけもみなうけよふで  
どのよふなたすけとゆうもしんじつのおやがあるからつきひゆうのや  
このつきひもとなるぢばやもとなるのいんねんあるでじゆよじさいを  
このはなしなんでこのよにくどいならたすけいちじよふうけよふのも  
と

このもとはどこをたすねてみたるとしてしりたるものはさらにあるまい  
此の元は人間始め世界始めの原始的事實を云ふ。

そのはづやつきひたいないりこんではなしするのはいまはじめやで  
このせかいちれつみえるつきひなりどこのことでもしらぬことなし



つきひよりみなそれごとくとみさだめてせんとあくとをみわけするぞや  
つきひよりなんでこのよにくごいならあしきみえるがきのごくなから  
だんくとおんがかさなりそのうへはぎゆうばとみえるみちがあるか  
ら

人より恩を受けて報ゆることを知らぬものは此の世から牛馬に墮ちて行かねばならぬ、例へば人から牛や馬の様に酷使せらるゝのも其れである。

どのよふなものでもつきひしんじつをうけとりたならみなたすけるで  
いまゝではごんなはなしをしたることもなにもみえたることはなけれど  
これまでもみなみえきたることなれどほんもとなるをしらぬことから  
これ迄の宗教にも豫言と豫言の實現(奇蹟)があつたけれども本家本元思想を知ら  
なかつた。

かみなりもちしんおふかせみづゝきもこれはつきひのざねんりつぶく  
今日迄は天災地變は人類に對する神の殘念、神の立腹であることを知つたものがない。

このことをいまゝでたれもしらぬからこのたびつきひさきへしらす  
つきひにはみないちれつはわがこなりかわいゝつぱいおもてゐれども  
いちれつはみなめへゝのむねのうちほこりいつぱいつまりあるから  
このほこりすきやかそふじせんことにつきひいかほどおもふたるとて  
つきひよりこわきあぶなきみちすじをあんじてゐれどめへゝしらす  
に

神より見れば人間のする事は恰度小供が刀を振り廻す様なものである。

どのよふなたかいところごゆふたとてつきひのためにみなわがこやで



それしらすおやのすることさしとめてまたとりはろてこれはいかゞぞ

警官の暴行を云ふ。

つきひにはいまゞでござんことやとてあらわれでたることはなければ  
このたびはむねのうちよりすきやかにばらさんことにあとのもよふを  
このあとはどのよなものもいちれつにたすけたいとのしゆだんばかり  
を

このさまはたすけいちじよにかゝりたらどんなものでもいさむばかり  
や  
なにごともつきひいちどうゆうたことちがいそふなることはないぞや  
いまゞでもあくどいほどにといてあるなれどこゝろにわかりないから

しかときけおなじにんげんなるよふにおもふてゐるのはこれはちがう  
で

教祖をもつて吾々人間と同じ様に思つてゐるのは誤つてゐると云ふのである。

どのよふなことををしへてかゝるのももとなるおやでなくばいかんで  
いまゞでもなにををしへてきたるのもみなこのとふりはじめかけたで  
にんげんをはじめたおやがもいちにんどこにあるならたづねいてみよ  
教祖以外に人間の親だと云ふものがあるかないか尋ねて見よといふことである。

このよふのしらぬことをばだんくゝとゆうてゐれどもこれがまことや  
にちくゝにしらぬことをやないことをこれをしへるがつきひたのしみ  
神の唯一の樂みは子供の知らぬことを仕込むことであるといふ大慈悲心をとかれた  
のである。



このよふのにんげんはじめをやなるにてんのあたへはあるときけども  
このはなしにのこことやらちよとしれんつきひじきもつやろとゆふの  
や

このはなしどふゆうことであろふならかんろふだいにひらばちをのせ

教祖は小寒子嬢歸幽の日より滿三十年目に玉姫となつて生れさせ生れた其の日より  
三日を経て天より甘露を下し其の甘露をもつて玉姫を育つると仰せになつた。其れ  
は多分母乳のことを仰せになつたものであらうと思はれる。此處に甘露といふのは  
月に一度夜に甘露を下すと仰せになつた其のことであらうと思はれる。

このさきはあゝちこふちにみにさわりつきひていりをするとおもへよ  
きたるならわがみさわりとひきあわせおなじことならばやくそふじを  
人の障りは我が障りも同じこと。人の振見て我が振直せといふ意味。

そふじしたところをあるきたちどまりそのところよりかんろふだいを

此の年教祖は小寒子嬢を伴ひ目を閉じて立ち止まつて見、其の後仲田儀三郎、櫟枝  
の奥助、若江の市兵衛、辻マス(辻忠作の妻嬢留菊を負ふて)を眼を閉ぢて歩かせ立ち  
止つた所を甘露臺中心地とお定めになつた。

したるならそれよりつとめてをそろひはやくかゝれよこゝろいさむで  
こればかりどこたづねてもないほどにこれにつぼんのしんのはしらや  
これさいがたしかみえきたことならばどんなものでもおそるものなし  
なにゆうもしんじつなるのしよふこがみえんことにはあとのもよふを  
どのよふなたかいところのものやとてじゆよぢざいにはなしするなり

御筆先 八號終



# 御筆先 九號

明治八年(教祖七十八歳の御時)六月より御書取

いま、ではなにをゆうてもにんげんのことろのよふにおもてゐたれど  
このたびはなにをゆうてもにんげんのことろあるとはさらにおもふな  
どのよふなどでもしかときいてくれにんげんごころさらにませんで  
つきひよりどのよのこともしいかりとゆいかけるでなこれきいてくれ  
つきひよりやしろとなるをにんともべつまへだて、おいてもろたら

神様より教祖と小寒子嬢とを別間別鍋にせよとの仰せがあつたが秀治氏はこれに應  
じなかつた。



なにゆうもそれよりしかとうけやうてたすけするぞやしかとみてゐよ  
そのさきはどのよなたすけするのみなみなうけやうのもとであるから  
どのよふなことをゆうてもけさんよふたしかきゝすみしよちしてくれ

秀治氏は神が何事仰せられても何に孝盡れ婆の云ふ事位に思つて従順に命を奉ずるといふことがなかつた。

このさきはどんなむつかしやまいでもみなうけやうてたすけするぞや  
にんげんにやまいとゆうてないけれどこのよはじまりしりたものなし  
このことをしりたいからだんくとしゆりこやしにいしやくすりを

しゆりこやしは修理肥料である。

これからはなにかよろづをみなとくでどんなことでもしかときくなり  
これまでもたいてはなしもといたれどまだゆうてないしんじつのこと

けふからはどのよなことをいふやらなつきひのこゝろまことせきこみ  
にちくになにせきこむとゆうならばつきひとびでるもよふばかりを  
このはなししいかりきいてしよちせよどんなことをばするやしれんで  
このさきのみちのよふだしいかりときゝわけてくれつきひたのみや  
つきひよりとびでたことをきいたならかんろふだいをはやくだすよふ  
かんろだいすゑるところをしいかりとちばのところをこゝろづもりを  
これさいがたしかさだめておいたならどんなことでもあぶなきはない  
つきひよりとびでるところちよとはなしたかいところやとふいところ  
へ

たかいところは上流社會。とふいところは外國。



そのはなしきいたるならばいぢれつはなんとつきひはゑらいものやと  
せかいぢうみだんくとううであるそのひきたればむねがはれるで  
いまゝではさんじゆはちねんいせんからむねのざんねんまこときのと  
く

このたびはどのよなこともしいかりとみないぢれつにしらすことなり  
しらするもなにしらするとおもふかなもとなるおやをたしかしらする  
このよふなことをゆいかけしらするもなにのことやられたれもしろまい  
このよふをいぢれつなるにしんじつのたすけたいからしらしかけるで  
いまゝでにいたすけをばするからはもとをしらすんことにおいては  
いまゝでもしらすんことをばをしへるはもとなるおやとたしかしらする

もとなるのおやをたしかにしりたならどんなことでもみなひきうける

此の五首は重要な御神歌である。

このはなしたれがゆうとはおもふなよつきひのころばかりなるぞや  
よろづよのせかいちつれみわたせばやまいとゆふもいろくにある  
このたびはどんなむつかしやまいでもうけよてたすけかでんをしへる

かでんは家傳である。

これからはたしかにやくみゆてきかすなにをゆうてもしよちしてくれ  
このたびのなやむところはつらかるふあとのところのたのしみをみよ  
さきいよりせへいつばいにことわりがゆうてあるぞやしやんしてみよ  
どのよふなことをするにもさきいよりことわりたゆへかゝるしごとや



このはなしどふゆうことにおもふかなつきひじうよふしらしいから  
しんじつにこのいちじよをはやくとつきひのころせへてゐれども  
そばなるにつきひいかほどたのんでもきゝわけがないなんとざんねん  
どのよふなことをゆうてもいまのことなにをゆうとはさらにおもふな  
だん／＼となにのはなしをするにもなさきなることをばかりゆておく  
これからはなにのはなしをするならばかんろふだいのはなしいちじよ  
いまなるのかんろふだいといふのはなちよとのひながたままでのことや  
で

明治六年教祖は飯降伊藏に命じて甘露臺模型を作らしむ。

これからはだん／＼しかとゆてきかすかんろふだいのもよふばかりを  
このだいをすこしほりこみさしわたしさんじやくにしてろつかくにせ  
よ

いま／＼でいろ／＼はなしといたるはこのだいですゑるもよふばかりで  
これさいがしいかりすゑておいたならなにもこわみもあぶなきもない  
つきひよりさしづばかりでしたことをこれとめたならわがみとまるで  
これを見てまことしんじつつけつこふとこれはつきひのをしへなるぞや  
このだいがでけたちしだいつとめするどんなことでもかなわんでなし  
このだいてもいつどふせへとゆわんでなでけたちたならつとめするぞや  
これさいがつとめにかゝりでたならばなにかなわんとゆうでないぞや  
これを見よたしかにつきひじきもつのあたへしいかりたしかわたする



どのよふなこともたしかしんじつのしよふこなけねばあやうさいこ  
と

これからはどのよなこともだんく〜とこまかしくとくこれそむくなよ  
このはなしなにをゆうやとおもふなよかんろふだいのもよふいちじよ  
ふ

このだもだんく〜とつみあげてまたそのうへはにしやくしすん  
に

そのうへにひらばちのせておいたならそれよりたしかちきもつをやる  
ちきもつをたれにあたへることならばこのよはじめたおやにわたする

このよはじめたおやとは伊邪那岐伊邪那美の二尊のことであるが此處では特に教祖

をさしていふ。

てんよりのあたへをもらうそのおやのころをたれかしりたものなし  
つきひよりたしかころにみさだめてそれよりわたすちきもつのこと  
つきひにはこれをわたしておいたならあとはおやよりころしだいに

御筆先 九號終



# 御筆先 十號

明治八年(教祖七十八歳の御時)六月より御書取

しんじつのころつきひがみさだめてんよりわたすあたへなるのは  
ちよとしたることゝはさらにおもふなよてんよりふかいおもわくがあ  
る

このはなしどふゆうことであるふならからてんじくもころすまして  
このころどふしてすますことならばつきひとびでゝあゝちこふちと  
だんくゝとつきひたないゝりこんでじうよじざいをしてかゝるでな  
したるならなんぼからやとゆうたとてにほんのものにこれはかなわん



にちくくに見えるところできつくしんせなんどきどんなはなしきくやら  
どのよふなはなしきいてもさきいよりこれはつきひのはなしなるのや  
これからはほんのものはだんくつきひきたてこれを見ていよ  
なにもかものよなこともみなをしへしらんことをばないよふにする  
にほんにははしらをたてたことならばやまずしなすによわりなきよに  
いまではからやといふてはびかりてまゝにしてゐたこんどかやしを  
このはなしたれにどふせとゆうでなしつきひとびでまゝにするなり  
これまでもつきひをしらんものはないなれどほんもとしたりたものなし  
このたびはどのよなこともしんじつをゆうてきかしてたすけいそぐで  
このひがらいつごろなるといふならばたあのしゆりをしまいしだいに

たあのしゆりとは神の田の修理即ち人間の心直り次第の意味。

それからはなにかめづらしみちになるつとめのにんじゆみなよりてく  
る

だんくくにちくくころいさむでななんとやまとはゑらいほふねん  
にちくくにはやくつとめをせきこめよいかなるなんもみなのがれるで

此の邊は重要なことを述べられてあるから注意して讀まなければならぬ。

どのよふなむつかしくなるやまいでもつとめいちじよでみなたすかる  
で  
つとめでもどふいふつとめするならばかんろふだいのつとめいちじよ  
ふ



このだいをどふゆうことにおもふかなこれにつぼんのおやであるぞや  
これさいがまことしんじつおもふならつきひみわけてみなひきうける  
つきひよりひきうけするとゆうからはせんにひとつもちがふことなし  
このはなしどふいふことにきいてゐるかんろふだいのつとめなるのは  
ちよとしたるつとめなるとはおもふなよさんじゆるくにんにんがほし  
いで

三十六人は六人を一組にして六組。

そのうちになりものいれてぢうくにんかぐらづとめのにんじゆほしい  
で

神樂が十人鳴物が 人。神樂の十人は十柱の神。鳴物の九人は琴、三味線、胡弓、

笛、太鼓、鞆、檜鉦、拍子木、手拍子。以上九品の理は三品身につくの理と六品  
世界六臺の理とを表はす。六臺とは木火土金水風の六色である。都合合せて九つこ  
れは心の苦を忘れるといふ理である。十九人の勤めがすんで後に九つの音曲を奏し  
つゝ六人にて十二下り目を勤めるのは人間の陽氣遊びを御覽に入れて元人間を拵ら  
へた神の心を勇め奉るのである。

しんじつにこゝろさだめてしやんせよとりつぎのひとしかとたのむで  
このだいをこしらへよとてだんくつきひにんじゆのもよふするな  
り

にんじゆがしかとよりたることならばそのまゝだいてもでけることやで  
このみちはどふいふことであるならばつきひつとめのでへをゝしへて  
それよりもつきひいちれつせかいぢうつれていたならひとりでけるで



これさいがたしかにできることならばつきぐつとめちがうことなし  
つきぐは月々。

つとめさへちがわんよふになりたならてんのあたへもちがふことなし  
このみちはまことしんじつむつかしいみちであるぞやみなしやんせよ  
このにんじゆどこにあるやらしろまいなつきひみわけてみなひきよせ  
る

どのよふなところのものとゆうたとてつきひぢうよふしてみせるでな  
だん／＼とにんじゆそろふたそのうへでしんじつをみてやくわりをす  
る

やくわりもどふいふことであるならばかぐらぢうにんあとはなりもの

これさいがはやくしいかりそろたならどんなことでもでけんことなし  
けふからはだん／＼もんくかわるでないまゝでしらんことばかりゆふ  
いまゝでもどのよなみちもあるけれどつきひをしへんことはないぞや

どのよな道とは各種の宗教のことをいふ。

つきひよりたいてへなにもだん／＼とをしへてきたることであれども  
このたびはまだそのうへのしらんことなにもしんじつみなゆてきかす  
これまでではからやといふてはびかりたこれもつきひがをしへきたるで  
このたびはつきひもとへとたちかへりきのねしいかりみなあらわすで  
このよふのものをしいかりしりたものどこのものでもさらにあるまい  
しんじつにこのもとさいがしいかりとしりたるならばどこへいたとて



このはなしなんとおもふてきいてゐるこれとりつぎにしこみたいのや  
どによふなことをつきひのおもふにはにんげんもとをこれせかいじゆ  
へ

はやくとこのしんじつをいぢれつにしらしたるならはなしわかるで  
いかほどにはなしをといてきかしてももとをしらしておかんことには  
もとさいがしいかりゆうておいたならなにをゆうてもみなきゝわかる  
このよふのぢいとてんとはじつのおやそれよりでけたにんげんである

天地が實の親。

これからはからもほんもしらんことばかりゆふぞやしかとさきくなり  
どによふなこともしらんとゆわんよふみないぢれつにしこみたいから

にちくにつきひのころおもふにはおふくのひとのむねのうちをば  
このころどふしたならばわかるやろどふぞはやくにこれをわけたい  
せかいぢうしんじつよりのむねのうちわかりたならばつきひたのしみ  
それからはいぢれつなるのむねのうちわかりたならばつきひそれより  
だんくにとにちくころいさめかけよふきづくめをみなにをしへて  
せかいぢうおふくのひとのむねのうちみなすましたることであるなら  
それよりもつきひのころいさみでどんなことでもみなをしへるで  
どによふなことでもつきひしんじつにみないぢれつにをしへたいのや  
しんじつのころがほしいつきひにはどんなことでもしこみたいから  
このはなしなにをしこむとおもふかなこれからさきのよろづみちすじ



けふまではなによのこともみえねどもひがちかづけばひとりみえるで  
どのよふなこともやまいとおもふなよなにかよろづはつきひていれや  
つきひよりにちくくころせきこんでどんなもよふをするやしれんで  
せきこみもなにのこどやらしろまいなかんろふだいのもよふばかりを  
にちくくにみのうちさわりついたらこれはつきひのていれなるぞよ  
だんくくとみすますところせかいぢうきのどくながらもんくかへたい  
しやんせよくちでなにごとゆうたとてたしかなしよこなくばいかんで  
つきひよりたないよりもいりこんでぢうよじざいのさしづしよこや  
それゆへにいまでどこにないことをばかりゆうてははじめかけるで  
いまでもないことばかりゆうのもなこれもつきひのみなをしへやで

このたびのかんろふだいといふのもなこれもいまでしらんことやで

甘露臺は天理教初説の眞實。

どのよふなことをゆうのもみなつきひしらんことをばをしへたいから  
このやしきかんろふだいをすへるのはにんげんはじめかけたしよふこ  
なにごともみなこのとふりはじめかけせかいぢゆうのころすまする  
にちくくになんでもせかいちれつをいさめるもよふばかりするぞや  
だんくくとせかいのころいさむならりうけもろともみないさみでる  
このころどふしていさむことならばつきひにんそくつれてでるぞや  
それまでにあちこふちとりのよふなはなしだんくみなきくである  
どのよふなはなしきくのもみなさきいゆうてあるぞやしやんしてみよ



つきひにはなにをだん／＼ゆわれるとおもふであろふさきのたのしみ  
なにごともつきひのころおもふにはほんにこふきほしいことから  
にほんにもこふきをたしかこしらへてそれひろげたらからはまゝなり  
このはなしなんとおもふてみなものにはほんのものはみなわがことや  
日本國民の覺醒を要す。

それしらすなんとおもふてかみたるはむねがわからんつきひざんねん  
このところどのよなこふきしたるともこれはほんのたからなるぞや  
いちれつのころさだめてしやんせよはやくこふきをまつよふにせよ  
しんじつのこふきができたことならばどんなことでもつきひ／＼ろめる

今日迄傳つてあるのは偽の古記天理教の古記が眞の古記である。

つきひよりひろめをするとゆうたとてみなのころはしよちでけまい  
それゆゑにとりつきよりにしいかりとたのみおくからしよちしてゐよ  
このひがらくげんきたることならばなんときつきひどこへいくやら  
にち／＼にとりつぎのひとしいかりとこ／＼ろしづめてはやくかゝれよ

取次の人とは布教師のこと。

このみちはどふいうことにみなのものおもてゐるやらちよとにわから  
ん

つきひにはなんでもかでもしんじつをこ／＼ろしいかりとふりぬけるで  
このみちをかみへぬけたることならばちよよじざいのはたらきをする

かみへぬけるとは國教となること。



つきひよりこのはたらきをしかけたらいかなごふてきたるとゆうても  
こゝろよりしんじつわかりすみきりてどんなことでもをやにもたれる  
このさきはせかいぢゆうはどこまでもよふきづくめにみなしてかゝる  
だん／＼とこのみちすじのよふだいはみなわがことゝおもてしやんせ  
我が事く。然り皆な我が事である。

御筆先 十號終

御筆先 十一號

明治八年(教祖七十八歳の御時)六月より御書取

むなさきへきびしくつかへきたるならつきひのこゝろせきこみである  
このさきはいちれつなるにだん／＼とみのうちさわりみなつくである  
どのよふなさわりついてもあなじなよつきひのこゝろゑらいおもわく  
みのうちにさわりついてもめへ／＼のこゝろそれ／＼みなわかるでな  
しんじつにおもふこゝろとめへ／＼のしやんばかりをおもいゑるとを  
眞實のものとし己主義者とを分けるといふ意味。

つきひにはどのよなこゝろゑるものもこのたびしかとわけてみせるで



どのよふなこゝろもしかとみてゐるでつきひこのたびみなわけるでなくちさきのついしよばかりはいらぬものこゝろのまことつきひみてる

これまでもいろくはなしといたれどほんしんぢつがみえてないので聞いて眞實、見て眞實、誠眞實、本眞實。

けふのひはなにのはなしをしたるともちがうよふなることはゆわねどつきひよりいちどふゆうておいたならいつになりてもちがうことなしそれしらすばのこゝろはたれにてもせかいなみなるよふにおもふてこのたびのなやむところできしんせみなのこゝろもめへめこゝろも

小寒子嬢六月よりお障りを受く。これは神の止めるのを無理に梶本家へ子供の世話

に行き遂に惣次郎(春子の夫)氏と關係して妊娠した。其の爲めに妊娠八ヶ月目で中産して遂にお引き取りになった。梶本家へ行く時教祖は

「貸すことの出来ない身體であるけれども今から三年年を切つて貸してやる。三年経つと赤衣を着せて生き神として祀つてやる」

と仰せになった。其の時小寒子嬢はお婆様は面白いことを云ふと云つて笑つて行つたが果して三年目に其の通りに死骸に赤衣を着せて祀られる様になった。其れで「月日より一度云うて置いたこと何時になりても違ふことなし」と仰せになったのである。

このことをぢうよじざいはちがはねどみなものこゝろにしよちなけねばいぢれつにしよちをしたることならばつきひうけよてたしかたすけるこのたすけどういふことにおもふかなみつかめへにはそとへでるよふこれまでもつきひといふてだんくとはなしもといてきたるなれども



まだしんのところはさらにわかるまいこのたびどんなこともあらわす  
はなしでもおなじところでゆうならばなんとにんげんころなるよふ  
みなのものおもうころはきのどくやこのたびところかへてはなしを

これは秀治氏も松枝子も教祖を疑ひ神命を用ゐぬ故人をかへて傳へたら信するであ  
らうと云ふので當時櫟本に大工をしてゐた飯降伊藏氏(後の御本席)に扇をもたせて  
神のお取り次ぎをさせることにせられた。

これきいていかなものでもとくしんせつきひぢうよふみなこのとふり  
たいないへつきひいりこみぢうよふをゆうてゐれどもしよちあるまい  
このさきはせへいつばいにだん／＼とことはりたゆへかゝることなり  
つきひよりあらわれでるとゆうたとてだん／＼なにもことはりたゆへ

このたびのなやみてゐるをやまいやとおもっているのはこれはちがうで

小寒子のことをいふ。

こればかりやまいなぞとはおもふなよつきひぢうよふしらしいゆへ  
なにもかもどのよなこともしらすはさきのおもわくあるからのこと  
このはなしどふいふことであるならばさきのよろづはつきひ／＼きうけ  
つきひよりひきうけするとゆうのもなものといんねんあるからのこと  
いんねんもどうゆふことであるならばにんげんはじめもとのどふぐや

小寒子嬢は國狭土命の魂である。

このものにつきひよろづのしこみするそれでめづらしたすけするのや  
このことはちよとのことやおもふなよこれはにほんのこふきなるの



や

あれいでこらほどなにもすきやかにたすかることをはやくしりたら  
それしらすどふぞいなさすこのとこでよふじをさしておことおもたで  
こんなことはやくしりたることならばせつなみもなししんぱいもなし  
にんげんはあざないものであるからにつきひゆわれることをそむいた

神の御思召では小寒子嬢をして一生獨身で神の御用をさせる心算であつたが神意に  
反いて強めて梶本家へ行つた。其れが抑々の誤りである。

これからはどんなことでもつきひにはもたれつかねばならんことやで  
どのよふなことをするにもつきひにはもたれてゐればあぶなげはない  
このよふなけつこふなるのみちすじをしらずにいたがあとのこふかい

此の年の八月辻、仲田、松尾の三人が警察へ呼び出されて説諭を受け續いて奈良縣  
より取調の廉があるから秀治氏に教祖と共に同道すべしと云ふ命があつた。其の時  
秀治氏は風邪で寝て居たから辻忠作氏が代つて出頭した。教祖には長女の政子様  
お伴なし村役足立源四郎が付き添ひ出頭した。其の時縣廳からは譯の分らぬこと  
云つて愚民を迷して不都合だと云ふので辻氏は五日間留置せられ教祖は監獄へ入れ  
られた。三日目に出獄して御歸宅の當日小寒子嬢が亡くなつた。これも心得違から  
神意に反いた爲めで後から幾ら後悔しても詮ないことである。

このさきはどのよなことをゆはれてもつきひゆわれることはそむかん  
つきひよりやしろとなるのむなさきのつかへてあるをなんとおもうぞ  
このつかへひとなみなるとおもふなよつきひのこゝろまことしんぱい  
それしらすみないちれつはめへ〜にわがみしやんでしごとばかりを



つきひにはどのよなみちもみへてあるせかいぢゆうはそれをおもわずこのみちをこどもいちれつしやんせよどのよなみちがあるやしれんでどのよふなこともさきいらしおくあとでこふかいなきよふにせよこんなことなにをゆうやとみなのものおもふであるふこともかわい、せかいぢゆうおふくのことむねのうちわかるもよふがこれはないかよこのよふなことをくどくゆうのもなみちをあんじてゐるもよふからこれからはどのよなこともゆてきかすこれをかならずうそとおもふなこのたびのつきひのしごとしかときけあしきのよふなことはせんぞやどふぞしてめづらしたすけおしへたさそこでかゝりたしごとなるぞやいままでとこゝろしいかりいれかへてよふきづくめのこゝろなるよふ

このこゝろどふしてなるとおもふかなつきひたいないゝりこんだならにちく／＼にひとりこゝろがいさむなりよふきづくめのこゝろなるよふつきひよりにちく／＼こゝろいさめかけよふきづくめにしてかゝるでなこのはなしなんとおもふてきいてゐるたすけいちじよのもよふばかりを

つきひよりどんなことでもみてゐるでなにをゆうてもみなしよちせよことしからしちじうねんはふふ／＼ともやまずよわらずくらすとなら

神の云ふことを聞くなら秀治氏も松枝子も夫婦共今後七十年の壽命を授けるといふのである。けれども兩人共神命を聞かなかつたから秀治氏は明治十四年松枝子は十五年にお引き取りになつた。

それよりのたのしみなるはあるまいなこれをまことにたのしんでいよ



つきひにはいま、でどこにないことをばかりゆうぞやしよちしてきけ  
このよふなないことばかりゆうけれどさきをみてゐよみなまことやで  
なにぶんにめづらしことをするからはいかなはなしもないことばかり  
どのよふなないことばかりいふたとてさきをみてゐよみゑるふしぎや  
いまなるのなやみてゐるはつられれどこれからさきはこゝろたのしみ  
このよふなはなしくどくゆうのもなこれはまつだいこふきなるのや  
つきひよりこのたびこゝであらはれてどんなことをもはなしするのは  
どのよふなこともだんくしらしたさにはんのこふきみなこしらへる  
このよふのはじまりだしはやまとにてやまべごぶりのしよやしきなり  
そのうちになかやまうじといふやしきにんげんはじめどふぐみゑるで

このどふぐいざなぎいゝといざなみこくにさづちいとつきよみとなり

伊邪那岐の命の魂は善兵衛、伊邪那美命の魂は教祖、國狭土命の魂は小塞子、月讀  
命の魂は秀治。

つきひよりそれをみすましあまくだりなにかよろづをしこむもよふを  
このところなにをするにもどのよふなことをするのもみなつきひなり  
どのよふなことをいふにもみなつきひそばなるものはまねをしてみよ  
このよふをはじめてからにけふまではほんしんじつをゆうたことなし  
けふのひはどのよなこともしんじつをゆわねばならんよふになるから  
めへくになにをゆうとはおもふなよつきひのおもうよふにゆふのや  
なんどきにかへりてきてもめへくのこゝろあるとはさらにおもふな



ごのよふなものもしんからとくしんをさしてかへるでこれを見てるよ  
いかほどのごふてきたるもはつめでもつきひのこゝろこれはかなわん

御筆先 十一號終

御筆先 十二號

明治九年(教祖七十九歳の御時)十二月二十七日より御書取

けふからはつきひせかいをみさだめてむねのそふじにかゝることなり  
このそふじうちもせかいもへだてないめへくのこゝろみなあらわす  
で

明治十年三月十四日より御書取

いまゝではかみのざんねんやまくとむねにはこりがつもありあれども  
なさけないひがらもちいときたらんでどのよなこともゆうにゆわれん  
このたびはつきひしんじつみかねるでごのよなこともみなあらわすで